

---

# 童話と現実の世界～2つのスイッチ～

\*姫林檎\*

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

童話と現実の世界～2つのスイッチ～

### 【Zコード】

Z4323C

### 【作者名】

\*姫林檎\*

### 【あらすじ】

小さな子供がよく読む童話『赤ずきん』。私はその赤ずきんなんだ。いつ生れたかなんてわからない。『生まれる』なんてことがあつたのかもわからない。気がついたらここにいて赤ずきんを演じてた。誰か、どうかこの世界のスイッチを押してください・・・。

## 第1話 私は誰でしょう？（前書き）

ファンタジー小説です。

恋愛小説でもあるので、苦手な人はどうぞ回れ右を。  
更新が遅れることがあるので注意してください。

## 第1話 私は誰でしょう？

手には花の入ったカゴバック

頭はずきんをかぶつて

ひらひらスカートをはいている

そう 私は赤ずきん

童話の世界の赤ずきん

「何たそがれてんだ？」

ぼんやりと足元を眺めていた私に金髪で派手な顔つきの男が言ひ。

「別にたそがれてなんかないしー」

私はため息をついて返事をした。

性別は男というよりもオス。

人間というよりもオオカミ。

## 何もなしの世界

すべてが真っ白で何もない

「どうしてこんな世界に生まれてきたんだろ?」

「・・・生まれてきたのがどうかも謎だよな。気がついたらここにいたし」

狼がそういった瞬間、狼は田の前から消えた。

かわりに田の前に現れたのはキラキラした縁達。

私は森の中に立っていて、木でできた家のドアノブに手をかけていた。

いつもねつ。

そしてドアを開いてベッドの中の人物に話しかける。

出でるのはおばあさんなんかじゃなくて狼。

そして狼に食べられる

いつもねつ

こつもいりつなる

毎回 どんな時も どうなつても

私がどこかしたくても

## 第2話 童話の世界

目が覚めるとそこはいつも通り何も無い真っ白な世界だった。

が、急に狼の顔が現れた。

「大丈夫か？」

「大丈夫に決まってるでしょ！」

そう言つて思い切り頭突きをすると狼はみつともない声をあげておでこをおさえた。

私はバカにしたように鼻で笑つた。

「いへえええ・・・」

「痛くない！」

どうして私はこんなところにいるんだろうつ

話し相手は狼ぐらいしかいないし

いつだつて私は赤ずきんだし

いつもいつも同じ展開だし

私は泣きたくなつてきて、体操座りをした。

そう 私は童話の世界の中にいる

絵本の『赤ずきん』の世界の中にいる

『どうしてこのかわからぬ

『気がついたらここにいて 赤ずきんを演じてた。

誰かが本を開くと周りは森になる

それまでは真っ白で私達しかいない無の世界なのに。

何度も逃げ出そうと思つた

『ねばねあさとの小屋』なんかに構わず 森を走りつづけ

でもできなかつた

いつだつて物語が始まれば体がいつことを聞いてくれなくなる

勝手に体が赤ずきんになつて動き出す。

「赤ずきん? どうした?」

「どうもしないー。」

私はそつと立ち上がる。

「・・・なあ」

狼が私の背中に向かって言つ。

「どうして俺はプロントで、お前は赤ずきんなんだ？」  
「そんなの 知らない」

私に人間のような名前はない

でも狼には『プロント』といつ名前があった

私は赤ずきん

名前なんてない

だって名づけられてないもの

狼は誰かが名づけたみたいだけど・・・

どうしてなのかはわからない

でも 知りたくない

知つたら 私はこここの世界の住人じゃないことになりそうで

そうしたら 私はどこにいればいいのかわからなくなるから

よくわからないけど そんな気がする

「お前はあの話、まだ信じてるのか？」

狼アシロがまた私の背中にに向かって話しかける。

返事なんて 誰かが絵本を開けばかき消されてしまうのアリ。

「さあね。でも、信じても信じてなくともどうにもなんないよ」

私が返事をして狼のほつを振り返ると、狼は眉間にしわを寄せて私を見ていた。

私はまた馬鹿にしてたよう元で笑った。

信じてたって信じてなくつたって

自分がどうしたって変わらないんだよ~

それなり ピッちだつていじやん

信じてたら迷わるならへりへりだって信じるよ

### 第3話 2つのスイッチの話

そういうばいつだつただろう 赤ずきんのおばあさん役が言つた。

『 ここの世界にはね 2つだけスイッチがあるのよ』

私は初めてこのおばあさん、この世界のせいで頭がおかしくなつちやつたんじや？なんて思つた。

だけど

『 1つのボタンが押されると、貴方は他の世界へ行くことができる。物語の中じやない自由の世界よ』

あの頃の私にとつてその世界の住人がどれだけうらやましかつたかわからぬ。

だけど とにかく惹かれたのを覚えてる。

ここの世界

自由で 物語の鎌なんてない世界

その住人 その空 その森

すべてが魅力的に思えた

この世界の錆びた空も景色も見たくなかった  
とにかく逃げ出したかった

だけど

『もう一つのスイッチはこの世界に引き戻されてしまうスイッチな  
の』

『その2つのスイッチが押されるにはキッカケが必要なの。まず1  
つ目のスイッチのキッカケ・・・これが難しいのよ』

どんなことだつてやめりつて思つた

この世界から逃げ出せるのならなんだつてできるつて思つた

『キッカケ』を聞くまでは。

『もう一つの世界の住人が私達の物語を読んで貴方のことを「かわ  
いそつ」と思つての』

かわいそつ？

『狼に食べられる女の子を「かわいそつ」と本当に心の底から思い、

「助けたい」と強く思うの。』

そんなの私にできる」とじゃない

待ってるしかないなんて

『もう一つのスイッチはね、他の世界に行つてすぐに始まるの』

何が?と私が聞くとおばさんはプロントのまつをちらりと見た。

『狼ももう一つの世界に行くのよ。それで、貴方と鬼ごっこをするの』

鬼ごっこ?

鬼ごっこって、子供の遊びの?

『それで狼が鬼で、狼につかまつたら貴方はまたこの世界に戻されちゃうのよ』

聞かなかつたほうがよかつたかも知れない

だけど私はそれから今まで この話だけを頼りにしてた。

この真っ白で何もない無の世界で

この話と想像するもう一つの世界だけが鮮やかに色づいてた

## 第4話 現実の世界と男

だけどそんなの自分じゃどうもなことだし、童話を読むのは小さな子供ばかりなはず。

だから私のことを『かわいそう』と思つたとしても『助けたい』なんて本気で答える子なんていないだろ？

第一、私を見て『かわいそう』だなんて思うだらうか？

この頃の童話を読む歳の子供もませてるかもしねーし、『自業自得だ』なんて笑うかもしれない

そつねると道のりは長そうだな、と思いため息が漏れる。

だけど

長い道のつを歩こうとしてドアを開くと、前を見るのを忘れてる。

いや、忘れてるじゃないし気づかないでもない。

とにかく道のつホールは突然田の前に現れるんだ。

ふと気がつけばいつものように私は木でできた小屋の前にいた。

そしてまた ドアノブの手をかける。

ドアノブを回そうとした瞬間、視界がゆがんだ。

気分が悪い

くらりとした瞬間、目の前の情景が違った。

目の前には茶色い木ではなくつるりとしたグレーの扉だった。

ガチャッ

ドアを開けるとそこには見知らない男がたつていた。

「誰だ」

男はギロツと私を睨むと立ち上がった。

そうしてようやく私は何が起きたのか理解した。

あの話は本当だつたんだ！！！

スイッチが押されたんだ！！

ぼーっとしてゐる間に男は私の前にいて、ドアをおせつけた。

「うわー！ちょ、待つた！！」

「待ても何もないだろ 不審者

なんで私が不審者なのよー！」

私は慌ててドアを押された。

「待つてよー話ぐりに聞いたつていいでしょー？」

どうこか説得しないといけない！

確かブロント（狼）が鬼ごっこするんでしょー？

1人でいたら絶対につかまっちゃうよ

「話・・・ねえ」

男がまたギロリと私を睨みつけた。

私が力エルで男がヘビみたいに私は力チンと固まっていた。

「まあ、別に話ぐらい聞いてもいいかな。それから追い出すのも簡単そうだし」

男は私がプロントにするよつこ鼻で笑った。

それから私の腕をつかむと家中へひっぱつた。

「入り口につつたつてるな。迷惑だろ」

後ろを見ると道幅が狭いせいで女性が私のせいで通れずについた。

「こんなに道が狭いのも迷惑ね」

「馬鹿 アパートの道を広くしてどうすんだよ」

「あぱあと？」

私が言つと、男はため息をついて私の腕を強くひっぱつた。

「だから入れつて言つてんだろー」

「いーごめんなさいー」

慌てて謝り、私は男の家の中に入つた。

さつきはかなり慌てていて気づかなかつたけど、家中はシンプルすぎた。

必要最低限の家具に白い壁。

なんだかそつけなくてこの人の趣味とかが見えない。

片付いてる辺りはまあ、綺麗好きなんじゃないかな？

1つだけあった。

勉強机の上に大きな何か機械のようなものがあった。

「ねえ、これは何？」

「パソコンだよ。知らないの？」

「うん。何につかうの？」

「他の奴はネットに使つけど俺は文章つつのに使つてゐる。」

「ねつと？」

「もういいだろ 座れよ」

男はイラついた様子で座布団をどこからか出すと床に落として指差した。

私が大人しく座ると男は座らざるに壁によりかかつてまた私を睨みつけた。

「話をするんだろ? とつとつ話せよ」

私はちらりと男を見上げた後、話始めた。

男はじつと私を覗んで聞いていた。

私が話し終わると男は私を追い出さず、床にそのまま座り込んだ。

「だから俺にかくまつてくれと？」

「は、はい・・・」

「ふうん・・・まあ、嘘言つてるようには見えないけど人間なんて  
わかんないからな。第一信じられる内容じゃないな」

「でつでも・・・」

私は思わずじわっと涙を浮かべた。

でも ここにこさせてもうえないと私はまたあの世界に戻ってしまう

そんなの嫌だ

せめてもうこの世界を見たい

「ばつ ばか！泣くなよ！」

男は急に慌てたように立ち上がった。

「わかったー置いてやるーそのかわりにー！」  
「かわりに？」

私が聞いた瞬間、『ピンポーン』ビビンからか音がした。

男は舌打ちをすると私に隠れるよう合図して玄関へ向かつた。

私は慌てて他の扉を開けて中に入った。

そこには見慣れない大きなトイレがあった。

しゃがむやつとは違うなあ？

そう思つて眺めていると大きな声な聞きなれた声が聞こえた。

「赤ずきん、ここにいんだら？」

狼だ！！！  
フロント

私は慌ててドアに耳を押し当てる。

## 第5話 狼の想い

「うるせえな・・・他人の家で騒ぐんじゃねえよ

あの男の不機嫌そうな声が聞こえる。

ああ、どうなつてるんだろうーーー? ？

出でつたらばれちゃうし・・・覗くわけにもいかないし・・・

「じゃあ赤ずきん出せよ いんだろ?」

「何が赤ずきんだ そんなのいるわけねえだろ?」

「・・・嘘だね アンタ赤ずきんのにおい、ブンブンをせてるよ。  
俺は鼻が効くんだ」

そうだ 狼だから鼻が効くんだーーー? ？

狼と鬼うつこなんて不利じやんーーー!

「・・・いたとしても赤ずきんが望まない限り俺は手助けしないね  
「いいから赤ずきん出せつて!」

「うるせえな・・・いいじやねえかアイツの自由にさせてやれば」

たぶん、男が舌打ちをした。

そつだそつだ! 近所迷惑だ! 早くどつか行つちゃえーーー!

心の中で叫ぶと、大きな鈍い音がした。

ガンツ！――

壁を殴つたような音。

たぶん、狼プロジェクトだらう。

「アイツの自由になんて、させたくない！」

「はあ？」

「アイツの自由にさせたら俺はもうアイツに会えないんだよ――会つたら捕まえたつてことになるから・・・」

ふと、2つ田のスイッチの『キッカケ』を思い出す。

そつか 狼プロジェクトに捕まえられたらいけないってことは狼プロジェクトと会えないってことなんだ・・・

狼プロジェクトは大事な家族みたいな感じだけど・・・でも、狼プロジェクトよりもこっちの世界のほうが・・・

「俺はアイツが好きだから、会えないなんて嫌なんだよ」

ドクン と心臓が怪しい音をたてた。

田の前が真っ黒になつた気がした。

黒いものが胸の中で渦巻いてる気がした。

「アイツはずつとこの世界を信じて待つてた。待つてたつてビリしきつもないしもしかしたら裏切られるかもしれないのに。」

「・・・そうだな」

「・・・そういうアイツを見ると、抱きしめたくてきりがないんだ」

男がドア越しに私を見た気がした。

心臓は相変わらずドクンドクン言つていて、胸の中は黒いものが渦巻いてる。

私は右手で自分の左手をぎゅっと強く握り締めた。

「赤ずきんーーー！」

ビクッと体が震える。

「どうせ聞こえてんだろー？俺は一回もお前に嘘ついたことねえ！だから絶対にお前のこと捕まえるからなーー！」

バンッ！……！

狼の大声の後、負けないぐらい大きなドアの閉まる音がした。  
（プロント）

少しの間沈黙が続いた。

ガチャッ

寄りかかっていたドアが開かれて、私は外に飛び出す。

「うわ！？」

「……いつまでもトイレにいるなよ」

「……ごめんなさい」

私は小さな声で謝ると、また座布団に座った。

「告白までされて、でもこの世界にいたい？」

ストレートな質問に心臓がまた騒いだけど、私は小さく頷いた。

（プロント）狼にあんな風に思われてたなんて知らなかつた

だけど 私は同じように思つたことない

妙に重い空氣に耐え切れなくなり、私は背の低いタンスの上にある写真たてを見た。

そこには男と、その男に似た少し背の高い男がいた。

「・・・これは誰？」

背の高いほうの男を指差すと、男はため息をついた。

「俺の兄貴。」

それだけ言つと男は写真たてを素早く机の中に閉めた。

1秒でも見られたくないようだった。

「・・・貴方の名前は？」

「・・・ブルース」

「ブルース お願いだから私をここにおいてよーつかまりたくないの！」

狼の気持ちを知つてしまつたら なおさらだった。

これから先どう狼に接すればいいの？

あの白い無の世界は私と狼と後ほんの数人で成り立つてた。

そのほんの数人なんてほとんど喋る」じゃない。

あの世界で狼アロングを避けるなんてできねえんだ。

「 もう少しやるつて言つただろ」

ブルースはため息混じりに言つ。

私がぱあっと顔を明るくするとブルースは眉間にしわを寄せた。

「 ただし…条件が2つある。」

「 何…？ なんでもする…」

「 まず1つ このパソコンに触るな」

ブルースは机の上にあつた大きい機械を指差した。

触つたら壊れそうで怖くて触れないよ…

心の中で悪態をついたが、一応頷いた。

「 それから、2人で住んでるつて気づかれないようにしや。お前は俺の許可がない限り外に出ちゃいけない」

「 えええ…！」

「 嫌なさいいけど？」

男は器用にまゆを上にあげて私を見下すような態度をとる。

「 だつて…・せつかくこの世界に来れたんだから外を見たいよ

「…………じやあそのつひ連れてってやるから」

「本当！？だつたらいいやーー！」

私は思わずぽんぎこすくな。

それを見た男はいきなりふきだしておなかを抱えて笑った。

ああ、よかつた！！

これでこの世界にいれそつーー！

この人も優しそうな人だし、本当によかつたーー！

## 第6話 ブルースの「うまれた理由

「ねえ、一つ聞いていい?」

「ん?」

「さつきの[切]真のお兄さん、どうして隠したの?」

私が聞くと、ブルースは眉間にしわを寄せてわざとらしくため息をついた。

そりや言いたくないのかもしけないってことぐらい私にだってわかるけど、気になっちゃうよ!

「・・・似てなかつただろ」

「へ?ちょっと似てたと想うんだけど・・・」

私が言うと、ブルースは驚いたように口をぽかんと開けた。

「・・・似てるなんて初めて言われた気がする」

あれれ?

もしかして、顔が赤い?

氣のせいいかブルースの顔は少し赤いみたいだった。

嬉しいとか?

「俺と兄貴は全然似てないんだ。外見はともかく内面が特に。」

「好みが違うとか?」

「それだけならまだいいよ。全部が違うんだ」

ブルースはまた眉間にしわを寄せる。

それから少しだけ下を向いた。

「兄貴にできないことなんてなかつたんだよ。絶対・・・」

ブルースは机の中からさつきとは違う『真』を出して私に渡した。

そこには色鮮やかなシャツと半ズボンを着たブルースとお兄さんがいた。

「それ、知ってる？テニスウェアっていうんだけど」「てにすうえあ？」

「・・・テニスっていうスポーツがあんた。それを兄弟でしてて・・・・兄貴に勝つことなんて1回もなかつた」

ブルースは小さくため息をつくと床に座り込んだ。

私の目は見ないで、真下の床を見つめていた。

床と喋つてるわけじゃないのに。

「勉強も・・・・女も 絶対兄貴には敵わなかつた」

「女？」

「俺が好きになる女、全部兄貴のこと好きなんだよ」「うわ・・・」

思わず言つと、ブルースは苦笑した。

やつぱり私のほうは見なかつたけど。

「・・・家にいるのがいつも辛かつたんだよ。『完成した自分』がそこにいるから・・・」

完成した自分？

私にはよく意味がわからなかつた。

だつて自分は自分で、完成とかないんじやないの？

人間つて完成するものなの？

「・・・それに・・・中学卒業して、高校に入る時に知つたんだ」「何を？」

「俺は兄貴のためにうまれてきたんだよ」

「・・・お兄さんのために？」

「親が言つてたんだ。俺を産んだのは兄貴の練習相手にするからだつて・・・テニスの・・・」

ブルースはそういうと頭を抱えた。

私には横顔も見えなかつた。

ブルースがどんな表情してゐるのか全然わからない。

「だから高校入る時に1人暮らしをせてもらつたんだ。テニスもやめた。兄貴の為にテニスしてたなんて馬鹿馬鹿しい」

「どうして」の人はそんな風に考えるんだわ〜。

そんなことないはずなのに

「じゃあブルースは、お兄さんのためにテニスを始めたの?」  
「え?」

ようやくブルースが顔をあげて、私を見た。

ブルースの目は少し潤んでいた。

泣きそうだったのかもしれない。

「お兄さんのために生まれてきたの?お兄さんの練習相手になるために生まれてきたの?テニスを始めたの?」

「・・・・・違つ」

「そうだよね?ブルースは、お兄さんのために生まれてきたんじやないよね?」

私が言つと、ブルースの目から涙が流れた。

「・・・そうだよ」  
「じゃあどうしてテニスやめるの?家を出たの?お兄さんの」と嫌い?テニスのこと嫌い?家が嫌い?  
「・・・嫌いじゃない 全部・・・」  
「・・・そうだよね」

私がそう言つて頷いて、微笑むとブルースは目を強くこすつた。

「だけどあの時・・・兄貴のために俺を産んだつった親が許せなくて・・・凄く憎くて・・・悔しかつた」  
「・・・うん」

ブルースは自分の足に顔をくっつけて、声を殺して泣いていた。

私が肩を撫でると私の手をたたいた。

思わず笑うと、ブルースは小さな声で言つた。

「・・・そんなこと言われたの初めてだ・・・そんな風に考えたことも・・・なかつた」  
「・・・そつか」  
「・・・ありがとう」

その時 会つて初めてブルースの笑顔を見た。

その笑顔を見た時、自分の頭にある赤ずきんよりも自分の顔が真つ赤になつたのは どうしてだらう?

第7話 外の世界

どうしたもんだろ？

俺、ブルースは小さくため息をついた。

追い出すつもりだった赤ずきんはあつといつ間に俺の心の中に住みついていた。

まあ、兄貴の話のおかけなんだけど…

仕方ない  
置いてやるって言った以上、面倒見るしかないな

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「仕方ないな  
今日は外に出るか」

本三

私はにつこりと笑つて頷いた。

やつたやつた！！

外の世界が見れるんだ！！

あれ？ そういえば私の物ってなんだろう？ 何が必要なんだろ？

あつひの世界じゃ服はいつも同じだったしお風呂もトイレもなかつたんだよね。

まあ、おばあさんの小屋には色々とあつたから知つてたけど。

「あのわ、悪いけどこれ取つてくれよ」

ブルースはそうこうと私のずきんを取り上げた。

「ええ！？ それ、取らなきやだめ！？」

「あんな、ずきんなんてがぶつてる奴いないんだよ。しかもこれ結構汚いなー洗濯しといてやるよ」

私はイヤマイチ納得できなかつたけど、一応ずきんを預けることにした。

あれないとなんだか頭がむずむずするんだけどな・・・

「まあ、服はただのワンピースだしーとか・・・服も買えればいいし

ブルースはぶつぶつ言つと玄関に向かい、靴を履く。

「ホラ、行くぞ」

「ううん！」

私も慌ててブルースについていく。

外に出るとそこはやつぱり私にとって夢の世界だった。

「うわ・・・すげえ・・・」

人がいっぱい！！

中途半端な数の木

木じゃない何かでできてるたくさんの中建物

臭いにおい

「くわあ・・・」

私がつぶやくとブルースが苦笑する。

「タバコのにおいかな？俺は吸わないんだけど。  
「ブルースって、何歳なの？」

鼻を押されて鼻声で囁つ。

「ん？ 19・・・20だったつけ忘れた。誕生日いつだかわから  
ねえし」

「へえ 人間でもそういう人いるんだあ・・・  
「そういうお前は？」

「・・・・・・・・忘れちゃった」

本当は忘れたわけじゃない

忘れたんじゃなくて 誕生日なんて存在しないはずなんだ。

気がついたらあの場所にいたんだもの。

だけど どうしてだらり

『嘘つかなきや』って 思ひちゃったんだ

びひじてかなんて 自分でもわからないけど。

「そうこや一 赤ずきんって狼のいる小屋に絶対に入るだろ? あれ  
つて小屋に入らなきやいいんじゃねえの?」

ブルースが思い出したように囁く。

私は思わず苦笑した。

「・・・無理だよ」

「え?」

「小屋が田の前に現れれば私は絶対に小屋のドアを開けるしかない

の。どんなに嫌でも体が勝手に動いて開けてしまつた。「

「・・・・・ふうん」

私だつて 逃げられるものなら逃げる

だけじたとえドアを開けなくともあの世界から逃げる」とはできなかつた。

逃げたつて 逃げ出した場所はひとつある世界の中なんだかい。

## 第8話 ブルースとテニスと職業

「そんなことよりー、ブルースはテニス、しないの？」

なんだか暗い気持ちになつてきただので話題を変えようとその話をすると、ブルースの眉間にしわがよつた。

「なんでその話になんだよ・・・」

「だつてさ、テニス好きなんでしょう？どんなのか知らないけどトニスしてるブルース、見たい！」

ブルースは急に顔を赤くした。

それから急に早歩きになつて私の前を歩き出す。

「もうやめたんだからいいんだよー！」

「ええ～！？じゃあ今は何してるのー？？」

「何・・・つて・・・」

途端にブルースは足を止めた。

ブルースに追いつこうと軽く走っていた私は顔面をブルースの背中にぶつてしまつた。

「あ、悪い・・・」

「へ、平氣！」

「・・・別に今は何もしてねえよ

「嘘だー！こんな凄い世界にいるのに何もしてないわけないじゃんー！」

私が言つとブルースは不愉快そうに笑つた。

私も負けじとむつとした表情をする。

「別に・・・普通に生活してるだけだろ？適当に仕事して給料もらつて飯食つて寝てんだよ」

「仕事？何してるの？」

「なんだつていいだろ！」

「よくなによ！一緒に住むのこそー。」

私が言つと、ブルースは大きくため息をついた。

それから周りに聞こえないような小さな声でつぶやく。

私が『は！？』と大きな声で聞き返すと短く唸つてもう一度ぼそりとつぶやいた。

「・・・ファンタジーの・・・小説家」

「ええええええええ！？？」

「似合わねえだろ！？だから言いたくないんだよ！」

「似合う似合わないにはわかんないけど、だつたらどうして私の話、最初信じてくれなかつたの！？」

私が言つとブルースはまた眉間にしわを寄せた。

そのうちいつも眉間にしわがあるようなおじいちゃんになるんじゃないだろ？

「あのな、それを仕事にしてるからすぐに信じるって話じゃねえの。実際は半信半疑だよ。非科学的などだし・・・自分の田で実際に

見た世界じゃねえからな

「・・・ふうん」

ブルースは急にきょろきょろと辺りを見回す。

「何?」

「いや・・・なんでもない」

私が首をかしげるとブルースは私の腕をつかんでまた早歩きになつた。

早くここから逃げ出したいみたいだつた。

やつぱりいいよなあ 簡単に逃げ出せいで。

## 第9話 ブルースの母親

ブルースについて行くと凄く大きくて人のたくさんいる建物の中に入った。

「うわー！ひろーい！」

「デパートなんて赤ずきんの世界にはないよな」

ブルースはそう言つときょろきょろと辺りを見回す。

するとすぐ違う人達の中で1人の女性がブルースの肩をたたいた。

「こんなところで会うなんて凄い偶然じゃない？」

女性がにこりと微笑んで言つ。

するとブルースは女性の肩を振り払い、後ずさりする。

「あら、ひどい」

「誰？」

私が言つとブルースは私を睨みつける。

それと同時に女性が嬉しそうに笑つた。。

「えーと、この方は誰？」。

女性はニヤリと笑つと、ブルースの方を見た。

ブルースも女性をちらりと見ると、大きくため息をついて言った。

「俺の、母親」

「え！？」

じゃあ、さつき言ってた親！？

じいっとよく見るとそういういえば雰囲気が似てるかもしれない。

「まったく、一人暮らしして何してるのかと思えば・・・」

「か、彼女じやねえ！」

「あらあ こんなところに2人きりで来てつきあつてないだなんて  
凄い嘘をつくのね？」

お母さんかあ・・・

若いなあ ブルースつて何歳だっけ？

20歳として~20歳で産んだとして・・・40歳！？

若い・・・見えないなあ

「コイツは今日、うちに来た赤ずきんで・・・」

「赤ずきん？」

母親が聞き返すと、ブルースが『しまった』って感じの顔をする。

それからすまなさそうに私の顔をチラリと見た。

別に赤ずきんつてことバレちゃいけないわけじゃないからいいのに。

「もしかして、童話の赤ずきん？」

「はい。」

私が素直に答えると母親の顔がぱあっと明るくなる。

それからブルースを無視して私の両肩を強くつかんだ。

「まあ！凄いわあ！…すつゞい偶然だわあ！」

「え？」

「私はね、人魚姫だったのよ～」

ブルースは母親の発言を聞いてぽかんと口を開けていた。

にんぎょひめ？

「私はね～童話の人魚姫の人魚姫を演じてたのよ～そしたらね、今  
の旦那・・・つまりブルースのお父さんが助けてくれたの」

「えー！赤ずきん以外にもあつたんですかー！」

「私も今知つたわ！！」

凄い凄い！！

私が感動しているのに大して、ブルースは『信じられない』という  
感じだった。

「嘘だろ・・・母さんがそういうことって・・・」

「あらあ～赤ずきんちゃん、頑張つてね！貴方がブルースと結婚し  
たら面白い家族関係だわー！」

「な、結婚つて……！」

顔を赤くして言ひブルースに、母親はこじやかに言ひ。

「あの世界から呼び出したからにはきこいつちり責任とつなさいよ？  
ブルース。あの世界はね 本当にこわいんだから」

母親はブルースにそろこつとブルースの肩をぽんと優しくたたいた。

## 第10話 クロウさん

「責任も何も・・・」

ブルースが言いかけたところで母親はにこやかに手をふって入る  
に紛れた。

「つたく・・・」

「明るいお母さんだつたね」

「は？ あんなの・・・」

凄く明るかつた

あの世界にいた人だなんて思えない

あの世界の「わざを忘れてしまったんだ

あの世界は何もしてこない

だけど凄くこわかつた

いつもこわかつた

私達を縛つてたから

見えない鎖を体中に巻きつけてたから

「・・・赤ずきん?」

気がつけば私の体は小刻みに震えていた。

戻りたくない

あの世界に戻りたくない

「ブルース・・・お願いだから・・・私のこと追い出したりしないでね・・・」

「え?」

「嫌なの・・・もう戻りたくないの・・・」

お願いだから

もう戻りたくないから

「・・・追い出すつもりなんてねえよ。俺がお前のこと呼んだようなもんだし・・・」

「・・・うん」

「お前・・・大丈夫か?」

「・・・・・・・うん」

ブルースがいるなら大丈夫だよ

ブルースから離れたくない

絶対に離れたくない

「え・・・えーと、最初は薬局だなー・うん! あれだ! シャンプーと  
リンスとボディソープ買わなきや!」

ブルースは慌てたように言つと私の腕をひっぱつた。

大人しくついていくといろんな箱や筒や袋のあるお店に着いた。

「女物のシャンプーとかわからんねえから選べよ。」

「……しゃんぷーって何？」

「……は？」

私が聞くと、ブルースは口をぽかんと開けた。

「もしかしてお前、風呂とかはいらぬい？」

「うん。」

「うつわー……嘘だろ……でも臭くないしなー」

ブルースはそういうと綺麗に並べられた色とりどりの物の中から3つ選ぶと私の腕をつかんでまた歩き出す。

「いや 適当に買つとこ!」

「え……でも今までしなくて平氣だつたんだからいいのに。」

「いいんだよーまあ、お前の場合お買い物システムも知らないんだもつな」

「おかいものしすてむ?」

私が言うとブルースは苦笑する。

「発音違うし……買い物する時は、金払わなきゃいけないってこと。ま、買い物の時は俺が行くから知らなくていいか」

ブルースはそういうと大きな灰色の机の前に立っている男の人につきの物を渡した。

ふと、男の人があのブルースをじつと見つめる。

私のほうを見ていたブルースがそれに気づき、男を睨みつける。

「何ですか？」

「・・・お前、もしかしてブルース？」

「あ？」

男はブルースの両肩をつかむと大声で言つ。

「ブルースじゃん！俺だよ！クロウ！中学で仲良かつたじゃん！」

「あー、クロウか！でかくて氣づかなかつた」

友達かな？

なんとなく疎外感を感じて、私は2人から少し離れた。

「何あれ、彼女？って・・・もしかして結婚とかしてる？」

クロウとかいう男の人はブルースが渡した物を見て眉間にしわを寄せる。

「違う！ちよつとわけがあつて一緒に住むことになつて・・・」

「えー！あんな可愛い子と！？」

「ま、まあ・・・」

「いいなあ～いいなあ～

「アホ どうせお前も女癖なおつてねえんだろ？」

なんか、仲よさそうだなあ・・・

何のこと話しているのかよくわからないのが残念。

ほんやりと2人を眺めているとクロウさんが私のほうを見て二三つ

と微笑む。

私が頭を下げるときブルースのほうを見てニヤニヤ笑いだす。

「彼女じゃないなら俺に紹介してよ」

「まあか お前、今彼女何人いんだよ」

「んー？ こないだ相当きつたから3人ぐらいじゃねえかな」

「・・・相変わらずだな」

「モテる男は苦労するのです」

クロウさんはにこやかに言ひとブルースの渡した物を袋に入れてまた渡す。

「久しぶりに会った親友だからな。お金はいらないよ！ 俺が払つと

く  
「え、いいのか？ 助かるけど・・・」

「うん。で、あの子名前は？」

「まあか！」

ブルースは少し大きな声で言ひと私のほうへ戻つてくる。

そしてわざわざ渡されていた袋を私に持たせた。

「コイツには手、出させねえよ！」

ブルースはクロウさんにそういう捨てるときの腕をまたつかんでぐいぐいひつぱつた。

「ねえ、さつきの人って・・・」

「クロウつづつて俺の中学校の時の友達！ すつじい女好きだから近寄

るなーあ、近寄りせねえけどなー。」

「女好き?」

「ア。女でセレナ可愛ければ誰とでもつきあえるの。危ないの。」

ブルースは小さこ声こ聞かせるよひ元氣。

セレナに口綻れば?  
..

誰とでも?  
..

つもあえる?  
..

危ない?  
..

私の頭は『おかいものしつても』と『クロウさん』で混乱していた。

## 第1-1話 僕の世界

世界は全部『俺以外の誰か』が進めていた。

俺のしていることはすべてその『誰か』が作り出したもので『誰か』が指示したものだった。

自分が誰かに指示をすることはなかつたし・・・

いや、最近は誰かとかかわることが少なかつたかな。

高校を卒業してからは友達ともほとんど会つていなかつたし。

最近喋つた人つつたらコンビニの定員と親と出版社の人ぐらいだつた。

そんな俺の世界に赤ずきんが入つてきた。

赤ずきんはあつといつ間に俺のそばに住処を作つた。

クロウと赤ずきんを関わらせたくないなんていう、兄が妹を思つような感情まで生まれてきてるぐらいだし・・・

そんなことを考えて俺は短くため息を漏らした。

そんな俺を赤ずきんは不思議そうに眺めている。

「やういや赤ずきんや・・・赤ずきんつて呼ぶのなんか変だから名

前決めろよ」

突然の俺の提案に赤ずきんはしばりへ皿をぱちぱちさせた。

「ええと・・・」

全然思いつかなかいらしく、赤ずきんは皿を泳がせて何度も『ええと』と繰り返している。

「・・・マゼンダとかは?」

「マゼンダ?」

「あ、ホラ 色とかでマゼンダだかマゼンタだかあるじゃん。なんか赤っぽい色じゃなかつたつけ?」

「あ、赤ずきんだから赤?」

「やうやう。」

俺が頷くと赤ずきんは嬉しそうに笑った。

その様子がなんだか小さな子供を見ているみたいでなんとなく『可愛い』と言ふことになつ、慌ててその言葉を飲み込んだ。

「んじゃマゼンダ、行こう!」

「うん!」

マゼンダはまた嬉しそうに笑つて俺の後についてくる。

「次はなんだ? 服かな?」「服? これじゃダメ?」

マゼンダはそつとて今着てこむワンピースを手でひっぱった。

「それだけだろ？ 一着くらご買おう。」

そつとて俺は辺りを見回した。

まずい

自分で言つたからとはいえ、女物の服なんてどうして売つてるかわからぬ。

まして、女は好みの服がつるさることかクロウが言つてた気がするし、歳にあつた服がどうとか言つてた気がする・・・

ああ、それより安い店と高い店とあるんじゃないのか！？

そんなことをいぢりながら考えてると誰かが俺の後頭部を強くていた。

驚いてそつとを睨みつけるとそこにはニヤニヤ笑いのクロウがたつていた。

「そつきの人・・・」

「どうも～！ 何举动不審になつてんだよ もつと堂々と歩けよ。女との子と2人なんだからさー」

「な・・・ッ お前薬局は！？」

「 もうあがりだよ。終わったんだ。ホラ、私服だろ？」

確かにクロウは薬局のださい縁のエプロンじゃなくただのTシャツとズボンだった。

チラリとマゼンダのほうを見るとマゼンダは口を半開きでじっとクロウを見ていた。

まさか見とれてるんじゃないよなあ・・・

そんなことを考えて俺はまたため息をついた。

俺はシスコンな兄貴か！！

## 第1-2話 クロウと買い物

「んで、どこ行くところだつたんだ？大丈夫、邪魔はしねえよ

俺はチラリとクロウを睨んだ後、耳元で小さな声で言った。

「コイツの服・・・女物なんてよくわかんないんだよ

それを聞いたクロウが苦笑して俺を見た。

それからマゼンダのほうをじじりじり眺め始めた。

じぱいくして満足気にニヤリと笑つた。

「よしよし、クロウ様に任せなさい」

クロウは俺達に言つと一人でさつさつ歩き始める。

俺が黙つて後に続くとマゼンダも慌ててついてくる。

少ししてクロウに追いつき、横に並ぶとクロウは俺の耳元で囁く。

「お礼はあの子のメールアドレスでいいよ？」

「アホ 携帯持つてねえよ」

「へえ そなんだとじゃあお前のメールアドレスでいいよ

クロウはそうこうと自分の携帯を取り出し、俺のズボンの尻ポケットに手をつつこんで俺の携帯を引き抜いた。

それから勝手に俺の携帯と自分の携帯を交互にいじった。

しばらくすると俺の携帯を返した。

「お前・・・人の携帯勝手に・・・」

「いいじゃん。悪いことしてないし。」

「まあいいけどさ・・・」

クロウは女性関係以外のことは信用できる奴だった。

金の貸し借りも嫌いなほうだったし、約束もちゃんと守る奴だった  
覚えがある。

そういう奴は俺の身の回りには少なかった。

「お前、昔の連中とまだ連絡とつてんの?」

「あー・・・」  
一部だけど

「・・・だろうな」

何気なく口にした質問を俺はかなり後悔した。

昔の友達なんかの話はクロウにとってNGだった。

クロウは女性関係で「いやいやしたり、結構気も強くケンカも強  
かつた。

そのせいか一人でいることが多く、友達が少なかった。

まして一度別れようと決めた女は「ひびくふつたので女からはか  
なり恨まれていたし。

その女の元彼氏なんかはクロウを恨むことが少なくなかった。

そのせいいか特に女をとられたわけでもない男にも避けられていた。

そうそう、ケンカも強かつたから他校の連中がケンカしに来たこと  
もあったな。

そういう意味では結構有名な奴だった。

そんなクロウが昔の奴等と仲良くしてゐるわけないか。

「あ、でもルファヒードって覚えてるか？」

俺はその名前に覚えがあり、昔の記憶をよく思い出した。

いつこう時最初に出てくるのは教室の風景だった。

その中に外見だけはひ弱そうな美少女の男と、男勝りな感じの姉御  
な女が浮かんだ。

「ああ、いたな」

「アイツ等とは連絡取つてゐる。お前も仲良かつたよな？」

「ああ、そうだな。」

「そうそう。アイツ等結婚したんだぜ」

「け・・・ッ！？」

俺には当分縁のなぞそつない葉。

ルファとミーデリが！？

あのどっちが男でどっちが女だかわからんないような2人が！？

第一、いつからやうじう仲に！？

「なんか昔からルファがミーデリのこと好きだったみたいだぞ」

「へ、へえ・・・」

数年間関わっていなかったのに、ずいぶん変わったもんだつた。

やつぱり世界は『俺以外の誰か』が進めているものに違ひなかつた。

## 第1-3話 クロウと買い物2

ふと後ろを歩いているマゼンダのほうを見ると田代が合った。

そうじょぱさつきからマゼンダにはついていけない会話だった。

俺はマゼンダの腕をつかんでひっぱった。

「一。」

驚いた表情のマゼンダを見て思わず笑つとマゼンダは嬉しそうに笑つた。

「じつのが妹を見るシスコン兄みたいなんだらつか・・・

いや、マゼンダは妹じゃないし俺はシスコンとかじゃないし・・・

「じちやじちや考えているとクロウに頭をたたかれる。

「今、どつか飛んでたぞ?」

「や・・・大丈夫だ」

「ここのなんてどうよ?」

クロウが足を止めて指差した店は俺には当然、まったく縁のない世界だった。

フリルだとスカートだと・・・

彼女が多いことはいえよくもまあじつじつ店を覚えてるもんだ・・・

「・・・可愛い」

「マゼンダは小さくつぶやく。

その瞳はきらきら輝いていて、凄く可愛いかった。

「気に入った?ならよかつたー」

俺はそつと、そばにある服の値札を見る。

Tシャツが1550円・・・

別にいいか・・・」んなもんだよな・・・

「これ可愛い・・・」

マゼンダが触れたのはチョックのワンピースだった。

明るい茶色のギンガムチェック。

ああ、なんか似合いそうな・・・

「あー、それ少し丈短いからね・・・これとか下にはいたら可愛いよ」

クロウはまるで店の店員のようだつた。

どこからか黒くて足元がレースになっているスパッツを持ってきてマゼンダに渡す。

「・・・可愛い」

「マゼンダはそうこうした後、ちらりと俺のほうを見た。

「いいよ。買つてやるよ」

俺が言つとマゼンダはぱあつと明るく嬉しそうな顔をした。

まつたく そんな顔するんならなんだって買つてやるよ・・・

ほんやつとそんなことを考へた後首をふる。

いやいや……本当にシスコソな兄貴になつてどうする俺は――

「これとか似合つそうだねー」

服を選んだりはクロウに任せることにして、俺は2人を眺めていた。

なんとなくお似合いなんだよな 」の2人。

そういうえば俺といふよりクロウといふほうが楽なんじゃないかな女物の服とかわかるんだし。

そんなことを考へているとマゼンダが俺の腕をつかむ。

「ん?」

「これ、似合つへ。」

「マゼンダは白くてふわふわしたブラウスを俺に見せる。

「あ～・・・」

そんなのわかんないって！」

返事に迷つとクロウが苦笑する。

「あれだよ デニムのスカートがズボン買つてやれよ。それならブリッコっぽくないし」

「でにむ？」

「ああこうのだよ。」

クロウはマームのスカートを指差す。

ああ、やっぱりクロウのがわかるんだなあ

かといつて、こまかうじつしたつてあんな風にはなれないし・・・

結局俺はマゼンダの服を数着買つてやつた。

よかつた・・・財布の中多めに入れておいて。

まあ、当分こんな買い物しないよな

「・・・疲れた」

俺の手首をつかんだマゼンダが小さく囁く。

「慣れないところだもんな。向いのベンチで休んでいいよ

そつぱつベンチを指差すとマゼンダは小さく頷いてからふりふりベンチへ向かう。

「じゃあブルース、ちょっと遊ぼー。」

「いや、面倒なことはしないぞ・・・」

ちびつとマゼンダのほうを見るとじっとこちらを見つめていた。

「じゃあマゼンダ、俺達ちょっと向こうに行くけどすぐ戻ってきてから。何かあったらすぐ人に立派なことじっくり行けよ

そうこうとマゼンダはまた小さく頷く。

それを確認すると俺とクロウは本屋のほうへ向かった。

クロウは一般書の中に俺の書いた本を見つけるとさりげなくページをめくりだす。

「・・・よく本人の前で読めるな

「本人の前だから、だる。よくこんなのが書けるよなー

クロウがそういうた時、誰かが俺の首をつかんだ。

驚いた俺をクロウが驚いた表情で見ている。

「 Bieber

耳元で聞き覚えのある声がした。

「マゼンダと回り歩いてなにがおこの町。

狼しかいない。

「……」なんといつて聞いてくるのか？

「俺は『』すぐだって来るよ」

「誰？」

「……『』めんくロウ、ちよつと聞かれたくなご話せせらるいひじ

「」

俺が言つとクロウはちいつと狼のほつを見た。

それから少しく頷くと『』かへ行ってしまった。

「……手を離せ。」

俺が言つと狼は素直に俺の首から手を離した。

少しく咳き込んでそひひを見る。

「なんなんだ……俺に用でもあるのか？」

「一つ、聞きたいことがあるんだ」

「ん？」

狼はじつと俺の顔を見る。

俺も逸りてすみに見てやる。

「アンタは赤ずきんが好きなのか？」

「・・・好きって、恋愛感情？」

「決まつてんだろ！」

「いや、恋愛感情は・・・ない・・・と毎日」

そりが もんなこと考えてなかつた

兄が妹を思つよつた感情と思つていたけど、おやか・・・

「・・・思つてるのが怪しいけど、まあいいや。だつたら質問変えるよ。あんたは赤ずきんを一生大事にできるか？」

「は？」

「アッシュはあの世界に帰りたくないだつたらあなたのそばにいるしかない。あんたはそれでいいのか？  
好きでもない女とずっと一緒にいれるか？」

## 第1-4話 恋愛音痴トマ・ゼンタ

返事ができず、ただ狼を睨みつける。

「・・・まあいいよ」

狼は呆れたようになつた。

それから俺を睨みつける。

「畜生とくせに、中途半端なことして泣かすのは勘弁してくれよー。」

狼はそのまま店を出て行った。

まさかマジンダのところへ行へのかと思つて俺も走り出したら、狼が足を止めて振り返つた。

「じばりばは様子だけ見てるよー手出しなさいー。」

まつとして俺も足を止めた狼は走り出した。

狼の後姿をただ眺めているとクロウが俺の肩をつかむ。

「何だあれ？赤ずきんとか一生とか・・・なんなの？」

「や・・・そのうち説明する・・・」

「今じやなきや駄目」

「はあ！？だつて・・・」

「今ーー。」

俺は仕方なく説明した。

マゼンダに聞かされただけの話だし、あまり信じてなかつたせいがあやふやだった。

どこから話せばいいのかもよくわからなかつた。

何度もつかえたものの、一応最後まで説明することができた。

「でもさ、もつ信じるしかないよね

「まあ・・・な

母さんの話を聞いた時点で信じてはいたけど・・・

でもやっぱりそんなことがあるんだろうか?

「で、ブルースはどうあるの?一生あの子とられる?」

「そんなことわからぬーよー!」

思わず吠えるみづと怒鳴るとクロウは苦笑した。

「相変わらず恋愛音痴だね。」

「相変わらずじょねえー。」

「だつてさ、女の子に告白されたり告白したりしても絶対に上手くいかなかつたじやん」

ああ、マイツに罵られると凄く腹が立つ・・・

「それはお前がちょっとかい出してきたり兄貴がちょっとかい出したりしたからだーー!」

「あ、そうだね。じの子もまだ俺とお兄さんがもういたかも」

俺はイライラに耐え切れず、楽しそうに笑うクロウに向けて歩き出した。

早歩きの俺をクロウが慌てたように追いかけてくるのがわかつた。

悪かったなー恋愛痴でー

恋愛なんて痴でも困らなー

俺は仕事一筋ついてこじたまといいんだ！

ふと、マゼンダの顔が浮かんだ。

それからすぐに頭を横に何度も振った。

違つ違つ違つーー

マゼンダはそいつのじやないーー

第一、マゼンダを好きになつてしまつとするんだーー？結婚とかはどうなるー子供はー？老後はー？墓はー？

この世界の人間じゃないマゼンダに籍とかはあるのかー？

ないに決まってるー

「つーー・・・あれ？」

俺は独り言のままひたすらぶつぶつと呟いた。

クロウもすぐ後ろで足を止める。

じゃあどうして母さんは父さんと結婚できたんだ?

俺は大きくなつてから思ついた。

馬鹿か? 俺は。

そつなるかわからぬことばかりなんだ?

俺はマゼンダのことなんて、好きじゃないんだが?

## 第1-5話 携帯とシステム？

マゼンダの待つているベンチまで戻るべく、マゼンダはすやすやと戻っていた。

「うわ・・・」

俺は思わず大きなため息をついてしまった。

普通寝るかー？外で！

俺は起こうからか携帯の着メロが聞こえてきた。

その時どこからか携帯の着メロが聞こえてきた。

クロウが慌てたように携帯を取り出す。

それから小さく舌打ちをして携帯をしまった。

「悪い、用事できたから帰る。」

「ああ、コイツの服とかありがとな。」

「うん。また連絡するから」

クロウはこっやかに手を振ると帰っていった。

横を見るとやけのクロウの携帯の音で起きたのか、マゼンダが眠りこぼれをしていた。

「ああ、起きた？」

「んー・・・寝てた？」

俺が苦笑するとマゼンダはキョロキョロと辺りを見回す。

「クロウなり帰ったよ?」

「ふーん・・・」

マゼンダは興味なさそうに言つとあぐびをした。

俺は携帯を開いてクロウからのメールを確認する。

電話番号とメールアドレスだけをついたメールだった。

番号はともかくアドレスはうたなくともわかるの。

「後・・・なんかいる物ないよな?欲しい物ある?」

俺が聞くとマゼンダはまだ眠そうな顔で首を傾ける。

「・・・あ

「うん?」

俺は手の中にある携帯をマゼンダに見せた。

「これ、離れた人と電話したり手紙みたいなのが取り扱う機械なんだけど・・・いる?」「必要なの?」「

俺の説明を聞いているのか聞こえてないのか、マゼンダは眉間にじわを寄せた。

まあ聞いても意味わからないだらびざな。メールとか。

「あー・・・俺は持つてほしいかも」

狼の顔が浮かんだ。

もしも俺が離れてる時に会つたりしたら・・・  
そりいえばアイツ、様子見るとかなんとか言ってたな・・・どっか  
で見てたりして?

「じやあこりん

俺とマゼンダは携帯ショッピングに行つた。

そこに入つてから1時間とか2時間とか　かかつたが、なんとか携  
帯を置くことができた。

「悪い。お前の名前と身分証明とか面倒っぽかったから俺の名前と  
か使つた。」

「つん 平気。じやあこりんの?」

「あー・・・」

マゼンダの氣に入った白い携帯に触ると、瞬間にマゼンダの舌  
で舌のダシがべぐで琴弓で舐められると、またマゼンダの舌

触れた。

その時、狼の言葉を思い出した。

『好きでもない女と・・・・・・』

そんなこと書いたってしようがないだろ

マゼンダの説明だと俺がマゼンダを呼んだみたいなもんだし、今のところは一緒にいないといけないだろ。

それに一生一緒に限らないだろ？

バイトするとか学校に行くとか・・・

詳しいことを母さんに聞いひ。

そうだ どつかの男と結婚して専業主婦でもいいじゃないか

ふと、他の男ところマゼンダが浮かんで一瞬イラついた。

今はそんなこと考えなくていいんだよーー

今のところ俺もコイツと離れたくない・・・・・・し?ん?

「・・・・・あれ？」

なんだ、それ？

やっぱ俺ってシステムの兄貴？

## 第16話 カメラ機能

携帯の使い方の説明をしてしまった理解してそういうな  
かった。

まあ、使つてみなければ慣れるだつて こや、慣れろーー！

俺は心の中で叫んだ。

まあ、もつ必要なものはないだらうな。

そう思い、『帰ひつ』とマゼンダに向かいつとしてマゼンダの方を向  
いた瞬間。

パシャッ！

携帯のカメラの不自然な機械音が聞こえた。

驚いてマゼンダのほうを見るとマゼンダの手には携帯があった。

その携帯は『カメラモード』になつていて、俺のほうに向かはられて  
いた。

「な・・・っ」

「えへへ」

眉間にしわを寄せた俺とは対照的に、マゼンダは嬉しそうに笑つた。

「えへへじゅねえー何撮つてんだ！消せよ。」

小さい頃から写真を撮られるのが大嫌いだった。

「いいでしょ？別に。」

マゼンダは偉そうに言つて携帯を開じた。

俺はため息をつくと携帯を開いた。

初めて持つ携帯を興味津々に眺めているマゼンダに携帯を向ける。

パシャッ！

さつきのマゼンダの携帯と同じような音が響く。

マゼンダが大きく口を見開く。

「ちゅ、自分も撮つてるじゃん！」

「お返しだよ」

俺が満足気に笑つて言つと、マゼンダは頬をふくらませた。

「いいもん。さつきの絶対に消してあげない！永久保存！」

「じゃあ俺も絶対消さない。永久保存してやるよ

マゼンダはチラッと俺のほうを睨んだ。

俺がへりつと笑つてマゼンダも笑つた。

ああ、今はこれでいいや

一生とか 先のことなんて今はこーい。

あんまり考えたくない

マゼンダの将来とか

マゼンダのこない俺の未来とか。

## 第17話 感情と勘

「いや、ブルース。」「ん？」

マゼンダの携帯を置つた後、俺とマゼンダは俺の家に戻つた。

慣れなことの後で疲れたマゼンダはすやすやと寝ていた。  
そんなマゼンダを起さなこう、俺はアパートの廊下でクロコウヒ電話をしていた。

「そういうのを世間では『恋愛感情』といふんだけど  
「はあ？ そんななんじやないだろ！」「…  
「だって、よしうるに離れたくないんだり？一緒にいたいんだり？  
そんなの好きだからじょん」「違う！ 絶対違う！」

大声を出したことで氣づき、口元を押さえた。

近所迷惑、近所迷惑。

「じゃあ俺がむりつけ、あの時の狼とかも同じこと言つだらう  
ね？」「な・・・つ」「困るんだろ」

図星をつかれた。

ぐしゃぐしゃと頭をかき乱す。

「・・・困るけどー好きとかじゃない・・・

「はー?なんで?」

「だつてこなん、今までと違ひじゃん

今までの俺の恋愛事情から考えて、これまた恋愛感情じゃない。

「今まで、一度好きになつても一緒にいたいとか他の奴にとられたくないとか思わなかつたし。」

「えー!?」

「別に他の奴と喋つてたりしてもなんとも思わなかつたよ」

俺がきつぱつ言つても、クロウは納得できなさげに唸つた。

「じゃあなんでソイシのこと好きだつて思つたんだ?」

「いや、好きとか違うとかって勘なんぢゃないの?」

「はー!?」

クロウがマヌケな声をあげるから、俺は思わず笑つてしまつた。

「お前か~それ、みんな好きじやなかつたんぢゃないの?..」

「なんだそれ?」

「みんな勘違いだつたつて」と一ホラ、男でも『ソイシ』と仲良くな

りたい』とか思う奴いるだろ?

そういうのと同じ感情だつたんぢゃねえの?」

俺はしづばりへ唸つた。

そんなこと一度も考えたことなかつた。

それに、女とつきあつたことなんてほんとうに俺に比べてクロウ  
は・・・・・。

そんなことをすると自分が変な奴に思えてくることがあるナビ、事  
実だ。

俺とクロウじや恋愛経験値がケタ違いだ。

「やつ・・・なのかな」

「まあ、少なくとも俺はそつだと想つよ。みつひく

そうなのか?

俺は マゼンダのことが好きなのか?

## 第1-8話　トイレへ逃げる

部屋に戻ると、マゼンダは田を見ましていた。

俺が戻ってきたことに気づくと走って俺のところまで来た。  
俺が驚いているにも関わらず、マゼンダは俺の腕を思い切りつかん  
できた。

「えー？」

「よ、よかつたあーー。起きたらいないから逃げられちゃったのかと  
思つた……」

「逃げる？ー？なんでだよー！」

「や、やっぱ迷惑だったのかなとか思つて……」

マゼンダの田は潤んでいて、半泣き状態だった。

俺は小さくため息をついてマゼンダの頭を優しく撫でた。

「大丈夫だよ 逃げたりしないから

「・・・うそ

マゼンダは顔を上げて俺を見ると、二つ三つと微笑んだ。

俺は慌ててマゼンダから離れた。

「『』ひ『』めごー俺、今凄くトイレ行きたいーー！」

あれひとことしてこむマゼンダを置いて、俺はトイレへ駆け込んだ。

どんだけトイレ行きたいんだよ俺ーー！

なんかクロウにあんなこと言わると胸に氣にならんだけどーー？

『ナウのを世間では「恋愛感情」と云ふだけも』

ちょっと待つてくれーーー！

数分後、俺は何食わぬ顔でトイレから出た。

時計を見るともう時で、そろそろ夕飯を食べなくちゃいけなかつた。

「マゼンダ、嫌いな食べ物って何？」

「嫌いな食べ物？」

「うん。そろそろ夕飯作らなきゃいけないから

俺が言つと、マゼンダはまたきょとんとした。

俺が何言つてるのかわからないらしい。

「もしかして、何か食べたりってことしなかった？」

「うそ・・・」

俺は小さくため息をついた。

お風呂には入らない　トイレにも行かない　飯も食べない

「じいぶん便利なもんだ・・・」

「じゃあいつか、俺もあんま腹減らないし」

たまに一皿何枚も食べない日がある。

どうしてだらう、引かれてるんだ

体が『生き残り』って思つてないのかもしれない

「じゃ、シャワーの使い方とか教えてやるから来いよ」

俺が言つと、マゼンダはすぐ立ち上がりつて俺のところまで走ってきていた。

風呂を開けるとマゼンダは首をかしげていた。

「ひねつたら水が出るから。で、これがシャンプーで・・・」

一通り説明をしても、マゼンダは首をかしげたままだった。

「わかった?できる?」

一応聞くと、マゼンダは首を激しく横にふった。

「だか、ひ・・・」

とつあえず、実際に水を出してみたり、シャンプーとかを泡立てたりして見せるとマゼンダはようやく理解できたらしく。

目をきらめかせていた。

「わかつたあ！ ありがとー！」

「そりやよかつた・・・じや、風呂入れよ。俺は後でいいから

「うん！」

マゼンダはここでしてた。

まあ、気にならないよ、元気よ。

不自然な態度とつてまた『逃げられるかと思った』とか言われるかもしれないし。

## 第19話 夜

マゼンダの長い入浴時間が終わり、その後で俺が入った。

思つてたより風呂場は綺麗なままで、俺は思わず笑つてしまつた。

俺が風呂を出る頃にはもう9時をまわつていた。

「今日は疲れただろうし、もう寝ていいぞ？ 俺は仕事しつづから」  
そうついつてパソコンの前に座るとマゼンダは小さく頷いて布団の中にもぐつた。

が、すぐに上半身を起こして俺のほうを向く。

「ブルース、布団は？」  
「・・・あ～、まあ、どうにかする」

この家には当然ながら布団が1組しかない。

だつて俺1人暮らしだし。

「じゃあ私、いいよ！ 風邪なんてひかないだろうじー。」「はあ！ いって！ なんでマゼンダが床に寝て俺が布団なんだよーおかしいだろー！」「え、でも・・・」「いいからー！ 寝てやるよーーー！」

思わずイラッとして怒鳴ると、マゼンダは眉間にしわを寄せた。

それは怒つたりしてる表情じゃなく、悲しんでるような表情で俺の胸を痛めた。

「・・・寝る

マゼンダはそりこりと俺に背を向けて布団にもぐった。

俺はため息をついでパソコンに向かった。

カチャカチャ・・・カチッ!!

以前からやっていたファンタジー小説。

よつやくラストが決まり、俺はメールで担当の編集者に原稿を送りつけた。

パソコンの電源を切り、ふと布団のまゝを見るとマゼンダが幸せそうに寝息をたてていた。

時計は12時を指していた。

空を見ると満月と星達が必死に自己主張をしていた。

## 第20話 星と月と黒い海

そういうえば昔 星と月が人間だつたらとか考えて小説書いたことが  
つたつけ。

そんなことを思いながら、冬用の毛布を引っ張り出した。

床にしいて寝転がる。

月が女で星が男だった。

男は一人で輝いて でも光が地球に届いてるうちに死んでる」と  
あって。

月は一人じゃ輝けなくて でも一つしかなくて。

ぼんやりと覚えてるうちに眠りについていた。

目が覚めると、布団の中のマゼンダはいなかつた。

「ん~?」

目をひすつて起き上がる。

部屋中を見回すと、マゼンダは俺の机に座っていた。

「・・・何してんの?」

「へ！？」

驚きの声を上げて、マゼンダが何かを落とした。

ドサツ  
!!

見ると、それは本だった。

۱۰۷

拾い上げて表紙を見ると、俺の本だつた。

け！？」

「お前、字読めんのー?」

۱۵۰

俺は頭を抱えてため息を一息した

顔が赤くなるのがわかった。

よりによくでこれ初めて恋愛要素入れて書いたやーたし

「……話せよな……話してくれれば隠したのに……」

「…うん、好評だつた。」

『ブルース君の小説つて、心情掘り下げて書くのに、恋愛物まだ書

いてないわね？』

『恋愛物書くと女の子が買つわよ～』

そんな言葉にのせられて、初めて書いた恋愛物。

なんか凄く乙女なことかいた気がするーー！

でも、思つてたよりも売上が良かつたのを覚えてる。

『星と月と黒い海』

俺は苦笑した。

ちよづど昨日思い出した小説だつたから。

星が男で月が女。

黒い海つてのは夜で暗くなつた空のこと。

ああ、題名からしてなんか乙女じやん。

「ブルースの本つて好き」

「・・・そあ？」

「うん ブルースがいい人だつて、凄くよくわかるから。」

そういえば その小説に書いた気がする。

『星はたくさんあって。』

『この世の男と女もたくさんあって。』

『その中で一人でも 見つけてしまったら』

『わくおしまいなんだ』って

## 第21話 マゼンダとスーパーと狼

「・・・ もう冷蔵庫、空になるからや。今日はスーパー行こつか。」

俺が言ひと、マゼンダはまた嬉しそうに笑つた。

マゼンダは昨日買ったワンピースを着て、クロウに勧められたスパンツを履いた。

ドアを開いて外に出ると、マゼンダは背伸びをしてあぐびをした。

「なんか、凄く気持ちいいーー。」

「ははっ ちゃんと荷物もわざわざかうなー？」

「うふー もうなんでもするーー。」

マゼンダはそうこうと俺の手首をつかんだ。

なんとなくその感覚が心地よくて、笑つてしまつた。

スーパーに入つて食品を見る。

「何によつかな・・・ どうせあんまし食べないからな・・・」

そんなことを言つてみると腹が少しく鳴つた。

やつと空いたかこの腹は・・・

「・・・あのね、ブルース

「ん~?」

マゼンダがまた俺の手首を握る。

「何、鳥のほうがいい?それとも魚がよかつた?」

「そうじゅ・・・なくてね」

「へ?」

マゼンダのほうを見ると、マゼンダは床を見ていた。

クリーム色でつるつるした床は、マゼンダと喋ったりしないの。」

「私、ずっとブルースのところにいてもいい?」

「・・・え」

返事に困っていると、誰かが俺の後頭部を殴った。

「つて・・・!?

後ろを向くと、そこには狼がいた。

マゼンダは震えて後ずさりをした後、すぐに俺たちに向けて走り出した。

狼がマゼンダを追つて走り出すとするのと、俺が狼の腕をつかむのはほぼ同時だった。

「なんでお前が止めるんだよ!..」

狼は俺を睨んで怒鳴った。

もう俺も狼も、周囲の視線なんておかまいなしだった。

「俺は！マゼンダのことが好きだ！でもお前は昨日、そういうじゃないつて言つただろ！？」

「確かに・・・言つたけどさ・・・」

「マゼンダが誰を好きかなんてわかるだろ！？でもお前がそんなんじゃマゼンダは傷つくんだ！？」

俺の意見を聞かず、狼は怒鳴った。

「俺はそんなの嫌だ！だから止めるな！」

狼はそう言つて、俺の反応を確認するように窓ガラスとマゼンダを追いかけて走り出した。

数秒間立ち去くした俺は、買い物かごを足元において回してから走り出した。

わからなこととは云ひあるが、問題だつて云ひあるナビ

『お前がそんなんじやマゼンダは傷つくんだ！』

じやあどんなんじや傷つかないんだよ？

お前なら傷つけずにこられるとでも思つのか？

そんなの 絶対に違う

## 第22話 私がいなくなつた時のこと

とにかく走つて逃げた

どこに行けばいいかなんてわからないし、ここがどこかなんてちつともわからぬ

もしかしたら同じところを行つたり来たりしてゐるかも知れない

全然わからないけど

とにかく逃げたかつた

あの世界は私を鎖で縛つてて

どんなに抵抗したくて逃げる」とえ許せなかつた

だからどこかで諦めてた

だけど

こっちの世界にはブルースがいたから

もしかしたら逃げ切れるんじゃないか、って

もしかしたら私はこの世界の住人になれるんじゃないか、って

ブルースとずっと一緒にいれるんじゃないか、って

思つたんだ

だけど

『私、ずっとブルースのところにいてもいい?』

ブルースは返事をくれなかつた

ずっと一緒にいたいって思つてたのは私だけだったのかな

私と喋つたりしてるときも

笑つてくれたときも

ずっとブルースは私にいなくなつてほしいうつて思つてたのかな

私がいなくなつた時のこととか考えてたのかな

涼しそぎて寒い」ところを抜けて、右に曲がると誰かにぶつかつた。

「す、すみませ……」

顔をあげると、そこには息を切らしたブルースがいた。

私が口をぽかんと開けていると、ブルースは眉間にしわを寄せた。

怒られる と思い、皿をざゅっとつむると、ブルースは私の頬を軽くつねつた。

「・・・へ?」

マヌケな声をあげてブルースを見ると、ブルースはため息をついて私の腕をつかんだ。

それから私をぐいぐいひっぱって、建物の外へ出た。

ブルースは私の腕を離さずに、無言で歩き続けた。

後姿じやどんな表情かわからなくて。

怒つてゐるかどうかもわからなくて　なんだかこわい。

「ごめん・・・なさい・・・」

小さな声で謝ると、ブルースが足を止めた。

それから私のほうを向くと、またため息をついた。

「・・・勘弁しろよ」

「・・・ごめんなさい」

「本当に意味わかんない」

私は謝るのをやめて、下を向いた。

「何があすと俺のところにいてもいい?だよ

「!」

「なんでそういうこと聞くわけ?」

駄目に決まつてんだろ って?

「あのな、俺だって血も涙もある人間だからな。」

「は？」

「いいに決まつてんだろ！」

「・・・いても いいの？」

「そう言つてんだろ！」

ブルースはまた私に背を向けて歩き出す。

私は慌てて追いかける。

「ねえ私、ここにいていいの？」

「・・・何度も言わない」

私は笑つて、ブルースの手首をつかんだ。

ブルースの手首が好き

あつたかくて 脈があつて

心地いい。

私、ブルースのこと大好きだよ。

そばにいると凄く安心するから。

こうこうのって なんていうんだろう?

なんていう感情なんだろう?

ねえ、ブルース

ブルースも今 同じ気持ちでいてくれてる?

## 第23話 暗い世界

それから 狼に会つことはなかつた。

次の日の朝 目が覚めるとブルースは床で寝てた。

起き上がつて寝顔を見ると、ブルースは寝返りをうつて私に背を向けた。

ごめんね ブロント

ブロントのこと嫌いになつたわけじゃないよ

だけどね

それ以上に この世界にいたつて思うの

ブルースのいるこの世界にいたいの

だから ごめんね・・・

ブルースに触れようとした瞬間、甲高い音が鳴り響いた。

ピンポーン・・・

ピクッと体を震わす。

同時にブルースのまぶたがピクリと動いた。

ピンポーン・・・

また鳴つて、少し遅れてブルースが起き上がった。

私が慌てて離れると、ブルースは私のほつをちらりと見ただけですぐに背を向けて玄関へ向かった。

ほつとしたような、寂しいような。

小さくため息をつくと、ブルースがいつの間にかそばにいて、私の腕をつかんだ。

「やつべ・・・・

小さく言つと、ブルースは私を押入れの中へ入れた。

「・・・・へ?」

「「「めんーしばらー」」」」」いてくれー!ー!ー

ブルースはそれだけ言つと押入れを閉めた。

中は暗くて、少し怖かった。

ガチャツ

ドアの開く音がした。

「どうもー毎度ーリンさんですよーー。」

「・・・ビーも」

女人の人・・・？

ドクン、と 心臓が重たくなった。

「メールで原稿受け取つたから読んであげたけどーー」

「読んであげたってなんスか・・・」

「アハハッ ま、いんじやない?面白かつたよ。売れるんじやない

?」

何の話 してるんだりつ・・・

私には全然わからない。

なんだか聞きたくなくなつて、私は戸に耳を押し付けるのをやめた。

しばらくすると、押入れが開いた。

「悪い、マゼンダ……その……出かけなくちゃいけなくなつたからさ。留守番してて？」

「え……」

「たぶん、すぐ戻るから」

ブルースはそういうと、また押入れを閉めた。

慌しくドアを閉める音が聞こえた。

暗い世界に取り残される

何もない私だけ 一人きりで。

## 第24話 欲張りとおしまい

そつと押入れから抜け出すと空っぽの部屋が広がっていた。

ブルースのいない空っぽの部屋。

少し甘いにおいのする部屋。

立ち上がって、ブルースの机の本棚に並んだブルースの本に触れる。

バサバサバサツ！！

何冊かが勢いよく落ちた。

慌てて拾いあげる。

たくさんの中文字が模様みたいに並んでる。

本当はこんな細かい字を読むのは大嫌い。

だけど

ブルースの本なら読みたいって思うんだ

優しい本だから

大好きになれるんだ

『人間は欲張りだつて言つけれど・・・』

## ブルースの言葉

「・・・人間つて欲張りなんだ」

じゃあ私はどうなんだろう?

欲張り なのかな?

きっと私は人間じやないけど

私つて 欲張りかな?

ブルースにも人生があつて

もしかしたらこの先私は邪魔になるかもしけない

だけど

ブルースと一緒にいたいって思う気持ちは欲張りなのかな？

こんな気持ち 知らなかつた

知らないほうがよかつたかな

## こんな気持ち

自分じゃどうしたらいいかわからないよ

「へやお・・・コソヤんの奴・・・」

俺はぶつぶつと怒りの独り言をつぶやいた。

リンさんつてこののはさつき家に来た女人で、俺の小説の世話をしてくれてる人。

俺が本を出す前からの担当さんで、なかなか世話になってる。

年齢が結構近いもんだから結構親しみやすくて、前から打ち合わせは外が多い。

ちなみに、クロウの彼女さん。

いや、実際今日になつて発覚したんだけども。

「あの昼間から酒飲んでしかもすぐ酔つてすぐ扱いになる」とクロウにぱりしてやろうか・・・

大きくなため息をついて家の鍵を出し、ドアを開ける。

するとそこには床に座り込み、床に広がった俺の本を眺めてるマゼンダがいた。

読んでるんじゃない 眺めてる。

「・・・マゼンダ?」

名前を呼ぶと、ようやく俺が帰ってきたこと気づいたらしく驚いた表情で顔をあげた。

「あ・・・おかいり・・・なさい・・・」

「ただいま・・・どうしたんだ?俺の本なんて広げて

床に落ちた本を拾い上げる。

「・・・別に 落ちただけだよ」

マゼンダはそういうと、開いてる俺の本を閉じていく。

1冊だけ、俺のあんまり気に入つてない本だけ閉じても俺に渡さない。

現実的で、しかも主人公をマイナス思考な奴にしようと思つたら必要以上にマイナス思考になつてしまつた。

書いててもテンションが下がつた。

マゼンダはその本の表紙をじっと眺めた。

背景が黒くて 様々な色の円が書かれて重なり合つてる表紙。

「マゼンダ？」

「・・・私、元の世界に戻るつかな」

「え？」

マゼンダは俺の本の表紙を見つめたまま言つ。

びつじて急にそんなことを言つのか俺にはわかるわけなかつた。

「だつて、ブルースに迷惑かと・・・思つて」

なんでおまえが「うつ病」と叫ぶんだ？

眉間にしわを寄せてしまがみこんだ。

「『う』にいたいってのは私のわがままで……ブルースのした  
いことの邪魔になるかもしないし……」

「はあ？」

「だってブルース、優しくして……だから私に『う』にいて  
言つたんじゃないの？」

『う』にいて……とこうよつもむじう……

「あのや、急にやうこひ」と言われても困る

「困るって……なんで？」

「や……だつて……」

あれ？ そういえばうつ病だけ

いなくなつてほしくなつて思ひけど

でも理由なんてそんなの……

「お、俺の『う』は『う』だよーお前、戻りたいなんて思つてないだろ  
？」

「そりや……戻らなくてもいいなら戻りたくないし……でもブ  
ルースの迷惑になりたくないし……  
「ちよ、『う』ち見てー！」

俺はマゼンダの腕をつかんでこつちを向かせた。

人の目を見ればわかるんじやないかと思つたけど、俺には全然わからなかつた。

そもそも俺、人の目見るの苦手なんだつた。

目を逸らしたくなるのを必死に耐える。

マゼンダは耐えてるよ! ここは見えなくて、ただ俺の田を見つめていた。

本当にそこそこかわいい顔じゃなくて、マゼンダの瞳は綺麗だつた。

「いや、俺は田を逸ひたがっていた。

そのまま沈黙が続いて、先に田を逸らしたのはマゼンダだった。

「え？」「……」「ごめん、なんでもない」

俺がマヌケな声をあげると、マゼンダは俺に本を渡した。

「忘れていいよ。」

何を考えているのか、それだけ言つとマゼンダは俺の机に座つて本棚を眺め始めた。

俺は本を持って立ち上がり、本棚に本をおさめた。

「・・・忘れるけど」

マゼンダのほうを振り向くと、マゼンダはじっと俺を見上げていた。

「でも俺、マゼンダは『ここにこっていて』なんて思ってない  
『え？』

「確かにやつて風に立ったけど、『ここにこってほしい』の方が正  
しい

そういった直後、俺は顔が赤くなるのを感じた。

かーっと顔が熱くなっている。

また本棚のほうを向いた瞬間、マゼンダがあの嬉しそうな笑  
顔を俺に向けた。

『星はたぐさんあって』

『その中で一人でも見つけてしまつたら

『らつおじまいなんだ』

『らつおじまだなんて思つてたんだろう

「おお、おまえ、おまえがやつてたんだね！」

見つけてしまった

ああ

わ、おしまいだ

## 第25話 再びスーパー

本棚のほうを向いた後、思い出す。

「あ

「へ? 何?

「・・・スーパー行ったのに、結局何も買つてねえ」

俺が言つと、マゼンダも思つ出したらしく笑つ出した。

そうだった 狼に邪魔されたから・・・

「じゃ、買いに行くから留守番してて。何もいじるなよ! 本は読んでもいいけど・・・」

「いやー。」

言い終わらなこいつ、「マゼンダがきつぱつと言つ。

「私も買つに行くー! 留守番なんてやだー。」

俺は思わず笑つてしまつた。

子供か? こいつは。

そんなにいい世界じゃないの?。

「・・・お前の場合、悪いところ知らないからか。」

「え?」

ただ　自由な世界つて思つてゐるのか。

「いやいや、なんでもない。じゃあ行くか

ため息をついて立ち上がり、家を出る。

マゼンダも慌てて靴を履いて出でくる。

スーパーに着くと人は少なかつた。

近くにもつと大きなスーパーがあるから、そつちに流れているんだ  
ろ。

こいつのほうが安いけど、向この方が品揃えがいい。

ま、俺の基準は質より値段だからな。

「さすがに腹減ったな」

「はらへつた？」

「あー、なんて説明すればいいかな。何か食べたいって思うんだよ。  
腹に何か違和感があんの。」

腹のほうを指差して言つと、マゼンダは眉間にしわを寄せた。

理解できぬいらしく。

そりゃ腹が減らないんだから理解できないよな。

「まあ、マゼンダの腹のほうが経済的だけどな

そつと笑うと、マゼンダはますます眉間にしわを寄せた。

「何食べたいかなー」

大きな棚には大きく赤い数字がいくつも書かれていた。

普段と値段変わらないくせに。

俺は生でも食べれるトマトなんかをカゴに入れた。

適当に買つていくと、スーパーを一周した頃にはカゴの中がいっぱいになつてた。

「ま、当然荷物運びすんだろ?」

俺が言うと、マゼンダは大きく頷いた。

「よつブルース!」

聞き覚えのある声に、俺はゆっくり振り向いた。

そこにはクロウがいた。

しかも、リンさんと一緒にいる。

「あら、ブルース君!」  
「・・・さつきの人?」

マゼンダがリンさんを指さす。

リンさんがきょとんとした表情で俺とマゼンダを見比べる。

「あ、声でわかったのか。

「リンさんがきょとんとするのはしじうがない。実際に会っていないんだから。

「えっと……この子は誰？」

「あー……」

説明に困っていると、クロウがこいつと微笑む。

それからリンさんに見えなじょうに素早く俺の腰の皮を強くつまんで言った。

「ブルースの、妹ですよ。」

妹！？

思わずクロウを睨むと、それ以上に怖い目で睨まれる。

「へえ、妹さん！」

「え？」

「初めてましてー！ブルース君の小説の担当をさせてもらっています。

リンです」

「え・・・あ！」

どうやら何か誤解が解けたらしく、マゼンダは目を大きく見開いて

俺のほうを見た。

そんな目で見られても何を誤解してたのかわからないから困るんだ  
けど。

## 第26話 ブルースとテニスとティンク

「そりかそりか 仲良くお買い物か！」

俺の腰から手を離したクロウがわざとらしく言へ。

「いや、兄妹仲良くしてるのはこことだと思つよーうふー。」

「あー・・・ひむと・・・」

「それにしてもクロウとブルース君が友達とはねーー。」

リンさんが睨みあう俺とクロウを交互に見ながら言へ。

こんな表情の2人でも『友達』と思つconsinさんつてある意味凄いか  
もしれない。

「じゃ、お邪魔かと思つますんで俺とマゼンダはレジへ行きますー  
『いやー！邪魔なんて！』

クロウはそついいながら今度は俺の足を思い切り踏む。

なんで俺がこんな立場にならなくせや いけないんだーー！

「ねえ、これ誰？」

場の空氣を読めない女が1人いた。

マゼンダが棚にぶら下がったポスターを指差す。

そこにはテニスウェアと着て、ラケットを持つてなにやらポーズを

決めた漫画っぽい男の子が書かれていた。

「ああ、テニス漫画の主人公だね。」

「てにすつて・・・」

マゼンダが俺のほうを見る。

「あー、ブルースって書やつてたんだろ? テニス!」

「あー、私知ってる! お兄さんが県で1番とかで・・・」

そのままで言つて、クロウがリンさんの腕を自分の腕でつつぶ。

『禁句だ』と言いたげだった。

びつてせうこのを俺の見えないとひでしないんだかつ?

「も、もうしないのか?」

「しない」

冷たく言つと、クロウが顔を引きつらせる。

リンさんは田を泳がせ始める。

言いだしっぺなマゼンダは俺達3人を何度も順番に見ていた。

「あ、そ、そういうえば… つちの編集部の男の人でテニスクラブやってる人いるわよ!」

「へー! それに行けばいいじゃん!」

「誰が行くか!」

俺はすっかり不機嫌になった。

「マゼンダ、帰ろ」

「え？」

俺はマゼンダ達を置いてレジへ急ぐ。

どうして俺がこんなにイライラしなきゃいけないんだ！

なんで気を使わねきゃいけない！？

どうしていまさうテニスなんてしなきゃいけないんだ！

どうせまた兄貴の話になるだけなんだ！

「どうして？すればいいじゃん！テニス！」

「・・・したくない」

「なんで？だってブルース、まだテニスが好きだって・・・」

「言つたけど！」

少し大きな声で言つて、同時にレジにカゴを置く。

レジのパートっぽいおばさんは何事もなかつたよつて商品をレジに通す。

「それとこれとは別なんだ」

テニスが嫌いなわけじゃない

むしろ好きだ

できることならまたやりたい

だけど

「ブルース、またテニスするの？」

まだ

びつして今日は会いたくない人間に会つんだーー

また聞き覚えのある人間の声に振り返ると、そこには誰もいなかつた。

が、このパターンを思い出し視線を下に向けると

いた。

「久しぶりだね~」

そこには、ティンクがいた。

俺の一つ上年上で、兄貴の彼女。

今どうか知らないけど、俺が兄貴とまだ一緒にいた頃は彼女だった。

「ふうん テニス、するんだ」

いつから聞いていたのか、ティンクは意地悪く笑つた。

本当に性格が悪い。

顔が可愛いのは俺だつて認めるが、どうして兄貴はこんな性悪を選んだのか。

これなら他の奴等のほうがよっぽどいいのに。

「馬鹿ねえ アンタのお兄さんに勝てるわけないじゃん

「するなんて言ってねえよー！」

「へえ？ 私には『したい』って言ひてるよ！」見えたけど

思い切りティンクを睨みつける、

が、ティンクは全然びびつたりしない。

むじむじ樂しそうに口の端を持ち上げる。

この笑みがイラつくんだ。

「アンタは天才じゃないんだから」

「・・・それ、何度も昔聞いた」

「天才じゃないアンタが努力したつてね、天才には勝てないの。」

ティンクは、そもそも樂しそうに笑つて言ひつ。

昔から何度も言われた。

俺は天才じゃない

兄貴は天才だけど。

凡人はどんなに努力したって天才には勝てない。

そんなのわかつて

兄貴にできることはない

俺が兄貴に勝てるところなんて 一つもない

## 第27話 天才と凡人と努力

「なんでそんないい加減なこと言うの？」

また空氣の読めない女が喋り始める。

ティインクが『誰?』と言いたげな顔でマゼンダを見る。

それでもマゼンダは黙らない。

俺も、黙らせなかつた。

「天才じゃなかつたら努力しちゃいけないの? 努力もしちゃいけないの?」

「・・・貴方誰?」

「努力ができるのに、しちゃいけないなんておかしいよ!」

マゼンダのいた世界は『努力』なんて通用する世界じゃなかつた

努力したつてしうがないし、それどころか努力のしうがない世界

「・・・彼女?」

ティインクが、俺のほうを見て言つ。

「違う!」

俺が言つと、ティンクはまた楽しそうに笑つた。

その笑みにまたイラついた頃、レジが終わつた。

俺は力、口を持つて机の上へ力、口を置くと、袋の中に詰める作業を始めた。

「戻つてきたいなら戻つてくれればいいよ！」

「・・・は？」

「また、壁を思い出せばいいよ」

ティンクは楽しそうに笑つて、マゼンダの肩をたたいた。

「いいこと教えてあげる

「え？」

「この子ね、100回以上お兄さんとテニスで戦つて、一度だつて勝てなかつたの、1ポイントも取れなかつたの」

ティンクはそれだけ言つと、俺達を置いて買い物を始めた。

俺はティンクの背中を睨みつけた。

マゼンダはただティンクを不思議そうに見つめていた。

アイツは俺を挑発してテニスを始めさせて、俺をいじつて楽しむつもりだ。

俺の敗戦記録を伸ばそつとしてるんだ。

ティンクの挑発になんかのつてたまるか。

あんな奴、目の毒社会の毒 だ。

## 第28話 久しぶりの運動

「ねえ、あの人誰?」

「・・・ティンクって名前で、兄貴の彼女。今は別れたかもしんな  
いけど」

「・・・ふうん」

彼女とか別れたとかいう言葉の意味がわかつたのかわかつてないの  
か、マゼンダは納得したようにため息をつく。

「兄貴にそりやもう惚れこんでて、兄貴の前で隠してるかどうか知  
らないけど凄い性格が悪いんだ。見てればわかるよな。ずいぶんな性格でな、俺を虐めるのが大好き  
なんだ」

「へー・・・」

「よく泣かされたもんだよ」

何を考えているのか知らないけど、ティンクはやたら俺を虐めてき  
た。

俺が半泣きにでもなればそりやもつ楽しそうに狂ったように笑つて  
いた。

数々の嫌がらせを思い出し、思わず大きなため息をつく。

ため息をつくと幸せが逃げるつていうけど、俺の場合身の回りの人  
間全員が俺を不幸にさせるんだよな。

「ま、例外もいるけど」

俺は大きく膨れ上がった買い物袋を、口を開けて眺めるマゼンダを見て笑った。

重い荷物をなんとか家まで運んだ。

「あー、久しぶりに運動したー」

「運動っていうの？」「んなの」

「ぜえぜえ言つ俺に対し、マゼンダはケロリとしていた。

「すいぶん元気だな・・・あー、疲れた！」

台所に荷物を置くと、俺は床に寝転がった。

そんな俺を見てマゼンダが笑い出す。

マゼンダも台所に荷物を置いた。

「・・・ねえ これ、なんで濡れてるの？」

マゼンダが俺に見せたのは溶け始めたアイスだった。

「うわ！…冷凍物があつたんだった！」

俺はマゼンダの手からアイスを奪うと慌てて冷蔵庫の冷凍室に入れた。

「れいとうもの?」

「うん。じつこのつて溶けるから面倒なんだよなー食べるこは楽なんだけど」

俺は仕方なく荷物を整理することにした。

とつあえず今から食べようと想つたマトとか魚なんかは出したままで、冷凍物や豆腐を冷蔵庫に入れた。

マゼンダは冷蔵庫には無関心で、俺の机の椅子に座つて俺の作業を見ていた。

俺なんかより元気なのに手伝ひはゼロか・・・

## 第29話　トマトといひかん

荷物を整理し終えた俺は、トマトをパックから出して水洗いする。

それからトマトそのままむしゃむしゃ食べ始めた。

「あ、食べる?」

そう言ってトマトをマゼンダに差し出すと、マゼンダが困ったような表情をした。

「いや、大丈夫だつて。水洗いすれば食べれるんだよ。」

そうこうと、マゼンダはトマトと俺を何度も見比べる。

それから首を縦に振るとトマトを食べ始めた。

ぼとりと汁が床に落ちる。

「あ!」

「残念。落としちゃ駄目なんだ。」

「ヤーヤしながら言つと、マゼンダが悔しそうに顔をゆがめる。

俺は笑いながらふきんで床を拭いた。

「・・・やっぱ、一人よりは楽しいな」

「そりと云つと、マゼンダが急に笑い出す。

「・・・何？」

「当たり前だよ！一人でいるよりも、2人のほうが楽しいよ！2倍になるんだもん！」

思わず噴出したけど、マゼンダはそんなことは気にしていなかった。

楽しいことが2倍、ね。

そういうこと誰かが本に書いてたっけ。

トマトを1パック食べ終わり、小さなヨウカンも一本食べ終わると俺の腹はだいぶ満足していた。

「美味しかった？」

マゼンダが何か言おうと口を開いた瞬間、携帯がなり始めた。マゼンダは大きく頷いた。

マゼンダの携帯のアドレスには俺以外のアドレスが入っていない。

だから俺のだとすぐに気づき、携帯を開く。

登録されていない電話番号。

「んー・・・」

まあいいか。

「はーもーもーしー?誰だ?」

電話に出ると、聞き覚えのある男の声。

『もしもし、ブルース?久しづつ。』

「は?誰?お前に見えよ」

電話の向こうで笑い声が聞こえた。

2人分の。

電話に向かって喋ってるのは男の声だけ、その向こうで女の声が  
する。

「わかんない?ルファだよ。」

「う・・・」

俺は思わず唸った。

「ううううまありみんな俺に近づきだすんだ!」

卒業してから一度も会っていないのに…

「うう」とはその女の声は…?「ううか?」

「ピンポーン!久しぶりだね!ブルース君!」

「君付けなんてすんな氣色悪い!で、何の用だよいまわり。なんで

俺の電話番号知つてんの?」

早口に質問すると、また笑い声が聞こえた。

マゼンダが不思議そうに俺を見ている。

「いや、リンさんが退職するからや。お前の小説の担当、俺になつた」

「・・・は?」

リンさんが退職?

ルファが新しい担当さん?

「え? ちょっと待てよ。なんで退職? お前、職業つて・・・」

「リンさんのことは本人から聞いてよ。俺の職業? リンさんと同じ。リンさんの後輩だけ?」

世間つて、なんて狭いんだ・・・

俺は大きくため息をついた。

「わかった! もういい! もう何も言つな! これ以上俺の頭を忙しくさせんな!」

俺はそれだけ言つと一方的に電話を切った。

それからまた電話がかかってくる前に、マゼンダが口を開く前に、リンさんに電話をかけた。



### 第30話 リンさんの退職

「もしもしーー?」

「あ、もしもし~ブルース君?どうしたの?」

「退職するってどういうことですか!なんでルファが俺の担当に…

・」

俺が頭を抱えると、電話の向いからリンさんの笑い声が聞こえる。

その向いにクロウの声も聞こえた。

「いやー実はや、結婚することになっちゃって。」

「…………は?」

ケツコン?

「…………あの…………おかしなこと聞きますけど…………相手つて……

「やだーークロウに決まってるじゃないーー!」

結婚!ークロウが!ーリンさんとー!?

俺の頭は完璧に忙しくなっていた。

リンさんが退職で?

結婚?誰と?ああ、クロウとだ

なんていきなり?

「なんで突然・・・」

「あーもしもし?電話変わったんだけど。」

「クロウー.ビリーヴ」とだよ!」

「どうこういって・・・そういうこと?」

話にならんーと心の中で悪態をつき、俺はため息をついた。

「なんで急に結婚なんて・・・困るー。」

「へえ、困るって何が?」

「急に担当が変わるなんて・・・しかもルフアだろー?」

俺ことって担当のはかなり相性のいい人じゃないといけない。

だって俺の将来とか今度の生活に関わるわけだし、仕事絡みとはい  
え結構会わなくちゃいけない。

そういう意味ではソーンさんと俺は相性はよかつたと思う。

お互に仕事の文句も言って合えたし、小説に関係ない話だつてできた。

ルフアが同じだとは限らないじゃないか。

「いいじゃん。同級生なんだからタメ口だし。話が尽きなくていい  
じゃん!」

「そういう問題じゃない!」

「まあまあ。しゃががないんだつてーしばらへりん、仕事できない  
から。」

「はあ?なんで・・・?」

電話の向こうでコンちゃんの笑い声が聞こえた。

「どうやらテレビを見てるらしく、急にテレビの音が聞こえた。

クロウがリンさんが音量を上げたんだろう。

「リンが外国に行かなくちゃいけなくなつたんだ

俺が何か言おうとした瞬間、テレビの音が聞こえなくなつた。

「聞こえた？ 聞こえてない方が好都合なんだけど」

クロウの言葉に、俺は電話の向こうにも聞こえるように大きくため息をついた。

「聞こえたよ。悪かったな」

「なんだ、聞こえたんだ。」

「で、なんで？」

「んー、ここから先は少し格好悪い話になるんだよなあ

クロウの言葉を無視して、俺は黙つてクロウが話し始めるのを待つた。

するとクロウのため息が聞こえた。

「リンって、元々アメリカで生活したいって思つてたの。乙女の夢なんだつてさ」

「へえ、理解できないな」

アメリカに行くのが乙女の夢？

「ジジが乙女的で何が夢なんだかわかんないな。

「で、俺としては行かせてあげたいわけ。そしたらこないだ向こうでの仕事先が見つかって、家も借りれることになった。」

「へえ で？ それと結婚どいういう関係があるの？」

「だつて、結婚しないと駄目だろ」

だから、何が駄目なのかを聞きたいんだ俺はーー！

「アメリカだぞ？ 考えてみるよーーーだつやつて連絡取れっての？ 国際電話なんて金の心配がさー」

「いや、お前もアメリカ行けば？」

「せひつと簡単に言つたナビ、バイト生活の俺にそんな金あると思つ？ 向こうでの仕事はどうすんの。」

俺は思わず苦笑してしまつた。

そういえばどうだつたな。

「つてなると俺は日本、リンはアメリカになるの。でも、これから先ずっとそんなに離れてたら何もかも離れちゃうじやん」

俺には、コンセントよりもクロウのほうがよっぽど乙女だよな。  
思えた。

リンさんの『アメリカに行きたい！』といつ夢よりも、今のクロウの乙女的発言のほうがよっぽど乙女だよな。

「だつたら結婚して縛り付けとけばいいかなつて。」

「お前、結婚は繩がよー。」

俺のツッコみは無視された。

「とにかく、俺はこれからもっとバイト頑張つて！資格取つて、英会話やってアメリカに行く！」

見えないのに、クロウが強く拳を握り締めたような気がした。

俺は小さく噴出した。

みんな必死だな。

### 第3-1話 子供のルール

不意に、子供の頃を思い出した。

今でも俺は若造なんだろうけど、強いて言つなら学生の頃。

あの頃は恋愛がすべてだった気がする。

誰が好きとか、誰と誰がつきあつてるとか、誰が誰に告白してふられただとか。

そういう話題が大好きな奴が多くて、俺もよくその中で笑つてた。

『生意氣』とか言つ奴も少なくなかつた。

子供には『グループ』があつた。

大人にだつて派閥とかあるんだろうけど。

グループの中で一人彼女が出来るとソイツを避けたがつた。

好きな子がいる の時点では面白がつてからかうくせに、いざくつついてしまうと『生意氣』と言つ出すんだ。

子供には子供のルールがあつた。

大人には理解できないかもしれない 子供だけの、誰が決めたわけ

でもないルールが。

俺もそれを知らないうちにでも守っていたし、守っていない奴を避けたりしていた。

別に避けなくつたって何もなかつたのに。

今思えばそれは、みんな気づいていなかつたり気づいていたとしても認めたがらなかつただけで

その中には確かに『嫉妬』とか『ひがみ』が含まれていた。

だけどあの頃の俺達の世界はそれを中心に回つていて、それがすべてで

どこか憧れていた氣がする。

別に身近じゃない 遠いどこの物語でもないのに。

そんな年頃なのに、兄貴に好きな女をとられてばかりじゃ俺だつて根暗にでもなるさ。

実際、俺は高校生の時結構暗いほうだった。

本を読むのが好きで、図書館に籠るのが好きで。

お気に入りの作家がいてその人の本を読み漁つて。

休憩時間は本を読んで昼休憩は図書室にいて。

特別誰かと仲良くしたりしない。

そんなの中学生までじゅうぶんだった。

もひつらびつしていたのかもしれない。

子供のルールがもう嫌だったのかもしれない。

女子に『暗い』とか『話しかけ辛い』とか

そういうことを言われてる奴と同類だったのかもしれない。

だけどあの頃の俺の中心は、恋でも まさか勉強でも 当然友情でもなく、本だった。

本がすべてだった。

なんて高校生だろう と今は思える。

いろんな本

図書館の本棚に詰まれた本達

俺の胸をときめかすのは本だけだった。

他のものは所詮『他のもの』だった。

まあ、俺の世界を含む『世の中』とこいつのものはその『他のもの』を中心回っていたのかもしれないけど。

友情物 論文物 恋愛物

なんだつてよかつた。

俺に苦手な本はなかつた。

どんな本もそれぞれ違つものを持つていて。

そんなどこにも俺の胸をときめかすんだ。

本物の友情より 本物の恋愛より

本の中の友情と恋愛のほつが俺には純粹に見えた。

子供のルールなんておかまいなし、純粹な友情と恋愛。

俺は電話を切ると、マゼンダのほうを見てため息をついた。

だけど今なら言い切れるんだ。

本を読んでいるだけじゃ わからなことをぬきがけの世にまたぐもん  
あるんだ。

### 第32話 ルファとフアミレスとパーヒーザリー

その後、リンさんがアメリカへと旅立つた。

俺は特別見送りに行くわけでもなく、手紙や電話をするわけでもなく、クロウとだけ連絡を取っていた。

特に理由はないけど、リンさんは連絡をとらなかつた。

それから数日たち、俺はルファと久しぶりに会うことになつた。

「じゃあ出かけるけど・・・家で大人しく待つてろよ。棚とかいじるな？台所にも行くなよ。」

「わかつてるつてば！ブルースの本読んでるから！」

「うん。じゃ、行つてくる」

「行つてらつしゃーい！」

マゼンダは俺の本を片手に、こじかに手を振つた。

リンさんが旅立つて数日、そう。

言ひ換えれば、マゼンダのことが好きだと氣づいて数日。

とはいっても、一緒に暮らしててそういうことを言つても氣まずくなるだけだもんなあ・・・。

そんなことを考えてため息をつくと、ルファとの待ち合わせ場所に着いた。

いつ行つても人のいるファミレス。

入るべく、既にルファは座つていた。

「久しぶり！」

ルファはなにひとつと営業スマイルで俺に手をふつた。

「その顔やめろよ。氣色悪い。」

「ひどいなー俺の営業スマイルだよ。？」

だろうな、と短く言つて俺も座つた。

ルファはメニューを見てぶつぶつ言つ出した。

「俺、コーヒー」

「じゃあ俺もコーヒー、ゼリー。」

「俺『』も『』じゃないだろそれ

「いいのいいのー。」

ルファはせう言つて定食を浮かべてコーヒー、ゼリーをつ頼んだ。

「俺、コーヒーって……」

「こいつといふ来たらなんとかザートみたいなの食べるもんだよー！」

ルファはせう言つてニヤリと笑つた。

まったく、とため息をついて水を一口飲む。

不意にルファの左の薬指の指輪が目に入った。

「なんだっけ、ミドリと結婚したんだっけ?」

「うん、新婚さん。うらやましい?」

「別に」

そう言ひて苦笑すると、ルファが携帯を出して俺に見せる。

「じゃあ、これってデマ?」

携帯を受け取って、画面を見る。

そこにはクロウからルファへのEメールがあった。

『今日、久しぶりにブルースに会つた!覚えてるか?  
アイツ、今可愛い女の子と2人暮らしたいだぞ!』

アイツは・・・。

またため息をついてルファに携帯を返す。

「いや、デマでもないけど・・・」

「けど、って?」

「別に、彼女とかじゃない」

「・・・は?彼女じゃない?なのに一緒に暮らしてんの?ブルース  
つて妹とか姉とかいるつけ?」

「兄貴だけだよ。その・・・色々と事情があつて。」

俺はクロウに説明した時と同じようにマゼンダのことを説明した。

途中、ルファは定員から「コーヒーぜりーを受け取りながらも俺のほうをじっと見て説明を聞いてくれた。

話し終わると、ルファはコーヒーぜりーを一口食べた。

「へーそんなことあるんだな。」

「しかも母さんも同じだとはな・・・」

「え?で、ブルースはその子のこと好きとかじゃないんだ?」「ツー!」

「コーヒーぜりーを飲み込もうとしてむせた。

そんな俺の動揺を見て、ルファがにやりと笑う。

その表情は、悪巧みを考えた子供と同じ表情をしていた。

水を飲んで落ち着けると、俺はルファを少し睨んだ。

「そんな顔するなよ。で、どんな子?可愛いつてクロウが言つてたけど。」

「さあ?可愛いとかそういう基準わかんないし。」

「だよな!お前つて本ばっか読んでたもんな!」

「そうだよ!」

俺は、もづ開き直った。

そして「コーヒーぜりーを大口で食べ始めた。

### 第33話 私の居場所

「そりそり、残念ながら仕事の話になるんだけどさ。」

「残念じゃない! そつちが本題だろ?」

ルフアは苦笑すると、メモ帳を取り出した。

「？」

\* \* \* \* \*

ぼーっとブルースの部屋を眺める。

ああ  
私がこの世界に来て、もう結構たつたんだな・・・

ブルースに会つて、ブルースのお母さんに会つて、クロウさんにりンさんにティンクさんに・・・

いろんなことあつたなあ  
・・・

なんだかだるくなつてきて、床に横になる。

部屋はしん、と静まり返っていた。

外も誰もいなくて、静かだつた。

まるで、どこにも誰もいないみたいだった。

この部屋だけがどこかに取り残されたみたいだった。

世界はどこかで進んでいて、ここだけが放り出されたみたいだった。

「・・・ああ、そうだった」

この世界に逃げてきたところで、私はこの世界の人間にはなれないんだ。

いくつかの世界の中で、私はたった1人 取り残されてるんだ

望んでいたとはいえ、放り出されたんだ。

私はたつた1人 取り残されてるんだ。

何もない 私が たつた1人で。

あの世界から逃げ出したくてしょうがなかった。

だからこの世界に来れたとき、凄く嬉しかった。

だけど

この世界は私のいるべき場所じゃない。

この世界に私はいるべきじゃないんだ。

この世界に私と同じ気持ちでいる人はいない。

あの鎮にまみれた世界で同じ境遇の人達と慰めあつのと

この自由な世界でこんな寂しい想いをするのと

どうちがよかつただろ?~

どっちのほうが楽だったかな?

この世界に来たいって思つてたのに

ずっとそのことを信じたのに

どうしてこんな気持ちになるんだ？

私の居場所は どこだろ？

### 第34話 声をあげて泣く

「あー・・・口の中が甘い・・・」

帰り道、ぼそりと言つて咳き込んだ。

コーヒーゼリーを食べ終わった後、ルファアが勝手に注文しだしてチョコアイスだと色々食べてしまった。

無駄な出費を！！

それにもあのチョコアイスは結構美味しかったな・・・今度マゼンダと行くか。

家の鍵を出し、ドアを開けるとそこにはじょじょとした空氣のマゼンダがいた。

俺が家を出てから今の間に何があつたんだよ。

「マゼンダ？」

俺に背を向けて床に座り込んでいたマゼンダの肩をぽん、とたたく。

マゼンダはぱくっと体を震わせて振り向いた。

その日にまつりと涙が浮かんでいた。

予想外の反応に俺は何も言えず、しばらく沈黙した。

「ビ、ビinished?」

「うう」

俺が声をかけて肩に触れたせいか、マゼンダの何かスイッチが入つたらしく、急に涙がぽろぽろこぼれだした。

慌てて洗面所へタオルを取りに行き、マゼンダに渡すとマゼンダはタオルに顔をうずめた。

その間に自分の部屋をちらりと見回す。

特に本棚が荒れているわけでもなかつた。

とはいっても、マゼンダをこんな風にするようなものをかいだ覚えなんていけど。

「マゼンダ?ビinished?」

顔をあげてタオルをぱーっと見つめるマゼンダ。

何が気に入らなかつたのか、俺の顔をちらつと見た途端タオルを放り投げた。

「え!?」

「なんでこうなるの?」

「はい?」

「なんで私、1人になっちゃうの?」

マゼンダはそれだけ言つてまた泣き出した。

俺はただ 黙つてその様子を見ていた。

マゼンダが泣いている理由がわからないもどかしさ

やつと理解した感情

マゼンダは声をあげて泣いていた。

### 第35話 消えた人

それからマゼンダは、3日1回ベビーに発作的に泣くようになった。

理由を聞いてもマゼンダは答えない。

毎回俺は黙つてマゼンダを見ているしかなかった。

たまに肩をさすつてやつたり、タオルを渡してやるべりしきできなかつた。

そんなのがしばらくなつたある日だ。

コンビニで牛乳を買って家に戻ると、マゼンダは床に座り込んでぼーっとしていた。

「ただいま

「あ、お、おかえり」

いつもじょつか、と何度も考えるけど いつも結論は同じだった。

『俺にはじつじつもない マゼンダが理由とか話してくれたらいいのに。』

いつもこれが結論だった。

俺はため息をついて冷蔵庫に牛乳をしまった。

「・・・おのれ、マゼンダ

「んー?」

マゼンダがほんせりとしながら返事をする。

俺が口を開くのと、ドアが勢いよく開くのは同時にさほど同時だった。

つまり

俺とマゼンダ以外の奴が家に入ってきたってこと。

「お前……」

「・・・ブロント?」

前のような震えもなかった。

ブロントは、俺とマゼンダを交互に見て走り出した。  
マゼンダに向かって。

まだほんせりとした表情のまま、マゼンダが狼の名前をつぶやく。

名前を呼ぶ前に

名前の持ち主は消えた。

狼がマゼンダの腕をつかんだ瞬間、部屋中が光に包まれた。

目を開けると、そこにはマゼンダも狼もいなかつた。

マゼンダから奪つたずきんもマゼンダが着替えて洗濯し終わつた  
ワンピースも。

何もかも 消えていた。

これから存在していなかつたみたいに。

プロントが入ってきた瞬間  
私は前みたいに怯えなかつた。

「じつしてだらり

前みたいに体が勝手に震えるみたいなことが全然なかつたんだ。

プロントがじつよいつこいつのむかひのわかつた。

だけど私が逃げる前にプロントは私の腕をつかんだ。

逃げる前じゃない

逃げようつなんて考えなかつた。

逃げなかつた。

逃げなかつた。

「じつして・・・急に入つてきたの?」

「じゃあ、あのままアイツのところにいたかったのか?」

「・・・」

「・・・俺じゃないけど、アイツでもなかつたんじゃないの?」

「プロントの言いたい」とはちゃんとわかつた。

だけど私は答えなかつた。

プロントは私に背を向けて歩き出した。

真っ白の世界で 私に姿が見えなくなるまで。

どうして私 どこにいても一人なの?

## 第36話 灰になつた世界とサミシイ

私の中で色づいていた世界は私の中で灰になつた。

また私は真っ白な世界の中にいる。

自由だと思っていた世界

あの世界の中にいき、私は喜んだのに。

なのですか? こんな気持ちになるの?

ブルースのはか

1人で咳いてみた。

その声も色づくわけもなく真っ白な世界に飲み込まれて消えた。

\* \* \* \* \*

何も残つていなかつた。

『確かにここにマゼンダはいた』という証拠が何一つ。

すきともワンピースも携帯も。

何も残つてはいなかつた。

俺の携帯のデータフォルダに確かに保存されたマゼンダの画像も。

何もかもが消えた。

俺の脳内に苦い記憶だけを残してマゼンダは消えた。

それでも俺は 元の生活に戻つとした。

前のよつて一日中家で本を読んだり小説を書いたりした。

たまに外に出て買い物もして、時々仕事関係者と連絡もとつて。

クロウとコンさんとマゼンダのことは言わなかつた。

ルファにだつて言つもつはなかつた。

だけど、バレてしまつた。

電話で『また打ち合せしよつ』と言われて断ると、それだけで勘

付かれてしまった。

だけど、俺以外にもマゼンダを覚えている人がいて少し安心した。

俺の夢なんじゃないかって思つたところだつたんだ。

ふと、溜まつた洗濯物のカゴの奥にマゼンダのために買った洋服があつた。

「こんなのは残して・・・どうすんだよ」

洗濯せずにしわくしゃになつた洋服にぽとと涙が落ちた。

今まで通りのはずなのに。

1人でこいつしていたはずなのに。

ただ 元に戻つただけなのに。

どうしてだ?

1人に慣れてたはずなのに。

ずっと1人でいたのに。

なんでいまさら・・・

『サニーシイ』なんて・・・

## 第37話 真っ白な空

ただただぼおつと真っ白な空を眺めてた。

空にて書こむのがなかつたづけ?

と云ふので、この世界の本は眞に由たる、

力の恩をうけた。頭にこの人間の仕事の心が力

「・・・ブロント」

「可つて」

「何で…別に、する」とないじやんか。「なんと」で

私が冷たく言うと、今度はプロントがため息をつく。

私は黙つて首を横に振つて、また前を向いた。

あの場所にいたくはなかつた。

あの場所にいたら自分が何なのかわからなくなる。

私はあの世界の人間じゃなくて

なんていえばいいんだろう？

自分がそこにいるのに、いたらいけないような気持ちになるときがある。

いたらいけないっていうか、いなじょうつな気もする・・・

「俺はここに戻ってきたかった。」

また振り向くと、プロントは私の隣に来た。

「俺はアイツにマゼンダのこととられたくないって思つてた。この世界に、2人でいたいって思つてた。」

そんなこと言われても・・・

「・・・ッ私は！」

俯いて、吐き出すように早口で言つた。

「こんな世界にいたくない！！戻りたくなかつた！プロントと・・・2人でいたいなんて思つたことない！私はブルースといったかつた！」

はあつと大きく息をつくと、プロントは私の頭にぽん、と手を置い

た。

「だらりと垂つた。」

プロントの言葉に驚いて顔をあげると、プロントは笑つてた。

この世界にいたくない

でもあの世界にもいたくなかった

あんな状態で あんな気持ちで

あの場所に存在したくなかった。

存在しちゃいけなかつた気がした。

だけど

1つだけ

「……シブルースと一緒に……いたかった」

「……うん。本当は、結構前から『気づいてた』」

「え？」

プロントは私のまつを見ず、横のまつを見ていた。

「俺も、あの世界についてからずつとマゼンダ達のことを監視してたんだ。

アイツの家のドアで聞き耳たててみたり、2人が外出したらつけてみたり。」

それを世間ではストーカーといつけれど。

「だからずつと前から、マゼンダのことば『気づいてた』」

「……私の、こと？」

私が聞くと、プロントは口を開きかけてすぐに閉じた。

それから続きを言わずに、にっこりと笑った。

「ごめん、教えない。」

「く？」

「ここで教えちやつたら少し悔しい。」

答えと、プロントの言葉の意味を私が理解するのはもう少し先だつた。

### 第38話 おばあちゃんの気持ち

プロントと話した後、私は久しぶりに『赤ずきん』の童話のおばあさんに会つた。

おばあさんは私の話を聞くと満足気に微笑んだ。

「やう、そんなことがあったの。」

「うん。」

「赤ずきんは、楽しかった?」

私は少しだけ黙つておばあさんの顔を見た。

おばあさんは、私が黙つても返事を待つ『ヒリヒリ』していた。

「・・・・うん」

そつまつて微笑むと、おばあさんは『ハリ』と言つた。

「私ね、ずっと氣がかりだつたのよ。」

「何が?」

「貴方にあの話をしてもよかつたのかどうか。『赤ずきん』にあの話をしてよかつたのかどうか。」

「・・・よかつたんだよ」

「やう、ならないの。」

私とおばあさんはじばじば黙つていた。

その沈黙の間、おばあさんが何を考えたのかわからない。

だけど私は、ブルースのことを考えてた。

ブルースに会いたい。

でもあの世界にいたかったとは思わない。

どうしてだるり~

どうしてブルースに会いたいんだるり~

「でも、残念だわあ」

「なにが？」

「だって、『マゼンダ』はその男の子のこと好きだったんでしょう？」

「・・・え？」

「今、貴方は『赤ずきん』だからどうだかは知らない。でもね、さつき貴方が話したのは『マゼンダ』の話でしょ？」

私は黙つて頷いた。

「私が思うに、『マゼンダ』は男の子のことが好きだったんじゃないかしら?だから・・・」

おばあちゃんが畠つ前に、私の田から涙がぽろぽろと流れた。

そんな私を見ておばあさんはただ微笑んだ。

ああ そつか

簡単なことだった。

ビーハー、近づかなかつたんだろう?

おばあちゃんに言われるまで気づかなかつた。

### 第39話 クロウは嘘が下手

\* \* \* \* \*

本棚の隅に、少ししわのできた絵本があった。

それは赤ずきんの絵本。

あの中にマゼンダがいる。

だけど俺はそれを見て見ぬふりをした。

マゼンダをまたこの世界に引き戻してどうする？

どうするつもりだ？

絵本の背表紙眺め、俺はため息をついてパソコンの電源を入れた。

カタカタとキーボードの音が響く。

ピーンポーン・・・

キーボードの音だけの俺の部屋にインターほんが鳴り響く。

俺は舌打ちをするとドアの向い側を覗き込む。

そこにはクロウが立っていた。

帽子をかぶっていたけれど、俺がクロウを見間違つわけがない。

俺はまた、ため息をついてドアを開けた。

「よつ なんか顔が険しいぞ！」

「・・・何か用か？」

「ひでー..じうせ元気ないんだろ? つから優しい俺が励ましたん  
だろー! ?」

クロウはそうこうしながら家に上がりこむ。

俺はクロウの背中を一度睨んだが、すぐにやめた。

悪氣があるわけじゃないだろ? し・・・ん?

「お前、なんで俺が元気ないと思つたんだ?」

「・・・え?」

クロウがビクツと体を小さく震わして俺のほうを見た。

俺は眉間にしわを寄せてクロウを壁へどんどん追い詰める。

クロウは『なんだよー』と笑つてはいたが顔が引きつっていた。

「なんでだ?」

「い、いや・・・その・・・リンがいなくなつたから寂しく・・・」

「嘘だな。」

「う・・・」

俺がきつぱりと語つと、クロウは否定もせずに唸つた。

ふと、ルファの顔が浮かぶ。

「ルファアか  
「え！？」

図星らしく、クロウは額にじわりと汗をかき始めた。

この男はいつも堂々としてるくせにビハリ、嘘が下手なんだ  
もづく。

## 第40話 聞かなきや言わなきやわからない

「・・・・・・・・・もういいんだって。」

「もういいってなんだよ！！」

「・・・・あの時、マゼンダは逃げなかつたんだよ。て「」とは「」の世

界にいたくなかったんだ。

俺と一緒にいたくなかったんだ

俺が一気に吐き出すると、クロウは俺を睨んでいた。

それでも訂正する気にはならなかつた。

だつてそうだろ？

抵抗しなかつたつてことは別の世界に戻りたかつたんだ

俺のそばにいたくなかったんだ

「お前、本人に聞いてないんだろ？」

「え？」

「そんなの、本人に聞かなきやわかんねえじゃん！！」

俺もクロウを睨みつけた。

クロウは田を逸らさず、じつと俺を睨んでいた。

「・・・・でも」

「第一お前、言つてないんだろ？好きだつてー。」

「・・・ああ、言つてない」

「言わなきや向こうもわからん！聞かなきやお前にだつてわからんないだろ？」

俺は返事をせず、クロウに背を向けて床に座り込んだ。

クロウの諦めたような、呆れたようなため息。

とんとん、と歩く足音。

靴を履く音。

ドアの閉まる音。

俺は最後の音を確認すると首だけ玄関のほうを向いた。

あの時 マゼンダはあのドアの向こうから突然現れた。

俺も、本人もかなり驚いていた。

「・・・泣いたらかつこ悪いだろうな」

独り言を言つて、一人で笑つてみた。

泣いたらごめん

それから赤ずきんの絵本を手にとつて、表紙をめくつた。

## 第41話 まだ間に合う

「・・・でもね、マゼンダはあの世界にいたくなかったの。でも一緒にいたかったの。」

卷之二

「マゼンダはどうすればよかつたの？赤ずきんに戻っちゃいけなかつた？もう戻れない？もうだめなの？」

言つてゐる間に涙がぼろぼろと流れ出した。

もう戻っちゃいけない？

うもダメになっちゃった？

あの時逃げなかったから?

ちゃんとさわがたから?

私がしつかりしてなかつたから?

「ブルースに・・・好きついでいえなかつたから?」言つて、伝わるの?  
?私の知つてるよつな簡単言葉で足りるの?どれをつなげれば伝わ

「・・・赤ずきん 大丈夫よ」

おばあさんはふふ、と優しく笑った。

「まだ間に合ひはすよ。だつてね・・・」

『きつとその男の子も・・・』

おばあさんの声はそこで途切れた。

ぐにやりと視界がゆがんで田の奥がズキッと痛んだ。

思わず田を瞑り、ふと田を開けるとそこには

ブルースがいた。

ブルースの家の中で、赤ずきんの絵本を持ったブルースがいた。

目が少し赤かった。

「・・・ブルース  
「久しぶり」

ブルースは笑つたり怒つたりせず、ただ無表情で私を見てた。

なんて言おうか考えてたのかもしれない。

短い静けさの後、口を開いたのは私が先だった。

「ツあのねーー。」

言いたことは山ほどあった。

だけど話しある前に喋れなくなる気がした。

既に唇は震えてた。

泣き出しちゃつたり「めん

でも 最後まで言ひから聞いて

アーティスト・アート

## 規則正しい包丁の音

- 1 -

重たいまぶたをなんとか持ち上げて、起き上がる。

ほんやうと金所の方を見るとマゼンタが料理をしていた。

「正解! 今起こそうとしたの。」

そう言つてマゼンダはにっこりと笑つて振り返つた。

あれから数ヶ月、マゼンダは料理やこの世の生活に慣れています  
つかり専業主婦みたいになっていた。

そのおかげか俺も規則正しい生活を送るようになつた。

朝起きて夜に寝て

3 食ちやんと料理したもの食べて

なんとなく体調もよくなつた気がする。

俺は朝特有のだるい体を起こして椅子に座った。

「マゼンダが」飯やら味噌汁やらを机に置く。

「あ、そうだ。さつきルファさんから電話があつてね！」  
「ん？ああ、そつか今日締め切りなんだつた。」

「3時までに仕上がらないようなら5時にお泊りセツト持つていいく  
からそのつもりでよろしく！だつて。」

俺は苦笑して牛乳を飲んだ。

「ちゃんと締め切りまでにやらなきゃダメだよー？ルファさんに迷  
惑かけちゃだめだよ！」

「いや・・・今まで締め切りギリギリだつたことなんてなかつたん  
だけど・・・今回はちょっと」

俺が言うと、マゼンダが首を傾げる。

「今回の小説、マゼンダがモデルの主人公なんだよ

「・・・へ？」

「ルファがどうしてもかいてくれつて。売れるつて保証するーとか  
力説するからさ。仕方なく。」

「え？じゃあ、私のことかくの？」

マゼンダが自分のほうを指差して囁く。

なんとなく恥ずかしくて本人に許可を取つてなかつたんだ。

俺は小さく頷いて味噌汁の小さな豆腐を箸で2つに切つた。

「すうーいー嬉しいー！私、ブルースの小説大好きだから凄い嬉しい

い！」「

マゼンダはきやあきやあ言ひて笑ひ。

予想外の反応に、俺はもつ少しで味噌汁をこぼすといふだった。

マゼンダのことならまだしも、やつぱり自分とのことも書かなきゃいけない。

そのせいかなんだか恥ずかしくてかぐのをためらってしまい、執筆の進みが悪いんだ。

ラストがどうも決まらない。

別に全部実話にすることないんだから、バッドエンディングにしたつていわけだ。

びひしたものか・・・

「ねえブルース！」

「うん？」

「私もね、小説かきたいの！」

「え？」

「ブルースみたいな小説かいてみたいの。初めにかいたのはブルースにだけ読ませてあげたい。」

そう言つてマゼンダは照れ隠しに笑つて味噌汁を飲んだ。

俺は笑つて「ありがとう」と言ひ、急いでパソコンの電源を入れた。

時々俺は急にパソコンの電源を入れて小説を書き始める。

マゼンダはそれを知っているから、そんな俺の後姿を見てくすくすと笑った。

そして俺はすぐにメールでルファに原稿を送った。

本はすぐに書店に並び、今までの本よりも長い期間平積みされた。

長い長い 本当にまだ続きのある、ハッピーハンドの物語。

童話の世界と現実の世界と その世界の2つのスイッチの物語。

モノクロな童話の世界の赤ずきんの女の子と色鮮やかな現実の世界のモノクロの男の物語。

2つの世界を結ぶ物語だ。

俺達の宝物だ。

## 最終話 宝物の物語（後書き）

後半、1日に何話も連続で投稿するようになります本当にすみませんでした。

長々とした小説となつてしましましたが、楽しんでいただけただけでしょですか？

とうより、こんな小説に最後までおつきあいくださつた方がいたでしょですか？

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました。  
この話は終わりですが、他の小説をしようと思っていますのでよろしくお願いします。

シリーズにしてる短編小説やファンフィクションの小説もよろしくおねがいします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4323c/>

童話と現実の世界～2つのスイッチ～

2010年10月11日08時12分発行